じ」など宣ふ。まめ事などいひ合はせて居給へるに、「この君と稱ず」といふ詩を誦んじて、又集まり來れば、「殿上にていひ期しつる本意もなくては、などかへり給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」と宣へば、「さる事には、何のいらへをかせむ。いとなかなからむ。殿上にてもいひののしりつれば、上も聞し召して、興ぜさせ給ひつる」と語る。辨もろ共に、返す返す同じ事を誦んじて、いとをかしがれば、人人出でて見る。取り取りに物どもいひかはして歸るとて、なほおなじ事を諸聲に誦んじて、左衞門の陣に入るまで聞ゆ。つとめて、いと疾く少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、この事を啓したれば、下なるを召して、「さる事やありし」と問はせ給へば、「知らず。何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣の取り成したるにや侍らむ」と申せば、「取り成すとても」と打ち笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはる人を喜ばせ給ふもをかし。

百十九段

○この君と稱ず―本朝文粹に、菅原篤茂「晉騎兵參軍王子猷、栽而稱二此君一」。
○本意もなくては―の下、歸るまじきにを略せり。

圓融院の御はての年、皆人御服脱ぎなどして、あはれなる事を、おほやけより始めて、院の人も、「花の衣に」などいひけむ世の御事など思ひ出づるに、雨いたく降る日、藤三位の局に、蓑蟲のやうなる童の、大きなる木のしろきに、立文をつけて、「これ奉らむ」といひければ、「いづこよりぞ。けふあす御物忌なれば、御蔀もまゐらぬぞ」とて、下は立てたる蔀の上より取り入れて、さなむとは聞かせ奉れど、「藤三位物忌なればえ見ず」とて、上についさして置きたるを、つとめて手洗ひて、その卷數と乞ひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、怪しと見てあけもてゆけば、老法師のいみじげなる手にて、

「これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖」

と書きたり。あさましくねたかりける業かな。誰がしたるにかあらむ。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかかる事宣はじ。なほ誰ならむ。藤大納言ぞ、かの院の別當におはせしかば、そのし給へる事なめり。これを上の御前、宮などに、疾う聞し召させばやと思ふに、いと心もとなけれど、なほ恐ろしういひたる

○御はて―諒闇のはて。正暦三年なり。
○御服―喪服。
○花の衣に―仁明帝の諒闇のはてに、僧正遍昭のよめる「皆人は花のころもになりぬなり苦の袂よかわきだにせよ」。
○藤三位―藤原繁子。右大臣師輔の女にて、一條帝の乳母。
○蓑蟲のやうなる―蓑着たる形容なり。
○卷數―經文など讀誦したる卷數を記して、願主に送る文書。
○胡桃色―表は香色、裏は白。
○椎柴の袖―椎柴は椎をいふ。喪服の染料とする故に、喪服を椎柴の袖と

いへり。
○仁和寺の僧正―寛朝僧正。
○藤大納言―未詳。
○かの院―圓融院。
○又のつとめて―翌翌日の早朝。

物忌を、し果てむと念じ暮して、又のつとめて、藤大納言の御許に、この御返しをしてさし置かせたれば、すなはち又返事して置かせ給へりけり。それを二つながら取りて、急ぎ參りて、「かかる事なむ侍りし」と、上もおはします御前にて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて、「藤大納言の手の樣にはあらで、法師にこそあめれ」と宣はすれば、「さはこは誰が仕業にか。すきずきしき上達部、僧綱などは、誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり給ふに、上、「このわたりに見えしにこそは、いとよく似ためれ」と打ちほほ笑ませ給ひて、今一すぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へれば、「いであな心う。これ仰せられよ。あな頭いたや。いかで聞き侍らむ」と、ただ責めに責め申して、怨み聞えて笑ひ給ふに、やうやう仰せられ出でて、「御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の刀自といふ者の供なりけるを、小兵衞が語らひ出だしたるにやありけむ」など仰せらるれば、宮も笑はせ給ふを、引きゆるがし奉りて、「などかく謀らはせおはします。なほ疑もなく、手をうち洗ひて、伏し拜み侍りしことよ」と笑ひねたがり居給へるさまも、いと誇かに、愛敬づきてをかし。さて、上の臺盤所にも笑ひののしりて、局に下りて、この童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「誰が文を誰が取らせしぞ」といへば、しれじれとうち笑みて、ともかくもいはで走りにけり。藤大納言後に聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

○僧綱―僧官の僧正僧都律師、僧位の法印法眼法橋などを稱す。
○一すぢ―一通。
○刀自―御厨子、臺盤、内侍所の雜役をつとむる女官。
○小兵衞―女房の名。

百二十段

つれづれなるもの　所去りたる物忌。馬おりぬ雙六。除日につかさ得ぬ人の家。雨うち降りたるは、ましてつれづれなり。

百二十一段

つれづれ慰むるもの　物語。碁、雙六。三つ四つばかりなる乳兒の物をかしういふ。又、いと小さき乳兒の物語したるが、笑みなどしたる。果物。男のうちさるがひ、物よくいふが來たるは、物忌なれど入れつかし。

○しれじれと―痴者らしく。
○所さりたる物忌―他所にてする物忌。
○馬―駒なり。

百二十二段

○御衣糀糠―ひめ糊。

○あとびの火箸―跡火の火箸。跡火は棺を送り出した跡にて焚く火、卽ち送火なり。

○などてか―下に書かざるべきを省けり。

○御前ばかり―主上の御前ばかりの儀式。

○試樂―ここのは次に春の趣にいへれば、三月中の午の日に行はるる石清水の臨時祭のなるべし。

○かもり司―かんもりづかさ。掃部寮、宮中の小道具の鋪設洒掃等を司る。

○使―祭の勅使。

取り所なきもの　かたち憎げに心あしき人。御衣糀糠の濡れたる。これいみじうわろき事いひたるとよろづの人憎むなる事とて、今とどむべきにもあらず。又、あとびの火箸といふ事、などてか。世になき事ならねば、皆人知りたらむ。げに書きいで人の見るべき事にはあらねど、この草子を見るべきものと思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、只思はむ事のかぎりを書かむとてありしなり。

百二十三段

なほ世にめでたきもの　臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらむ。試樂もいとをかし。春は空の氣色のどかにて、うらうらとあるに、清涼殿の御前の庭に、かもり司の、疊どもを敷きて、使は北向きに、舞人は御前の方に。これらは僻おぼえにもあらむ。

所の衆ども、衝重ども取りて、前ごとに居ゑわたし、陪從も、その日は御前に出で入るぞかし。公卿、殿上人は、かはるがはる盃取りて、はてには屋久貝といふ

○衝重―食器を載する臺。今三方といふ物。

○陪從―祭に行ふ東遊の笛の役をつとむる者。舞人に倍從する義。

○屋久貝―夜光貝とも。青螺。

○取食―饗應の殘物を庭上に投げて拾はすること。

○火燒屋―衞士が火をたく小屋。禁中及び東宮后宮等にあり。

○有度濱―駿河舞の一段。うど濱に、駿河なるうど濱に、うちよする波はなくさのいろ、ことこそよし、ことこそよし」。

○竹の笆―竹の臺のこと。清涼殿の東北にあり。

○一の舞―第一番の舞。

物して飲みて起つ。卽ち取食といふもの、男などのせむだにうたてあるを、御前に女ぞ出でて取りける。思ひかけず人やあらむとも知らぬに、火燒屋よりさし出でて、多く取らむと騷ぐ者は、なかなかうちこぼして扱ふほどに、かろらかにふと取りて去ぬる者には後れぬ。かしこき納殿に火燒屋をして、取り入るるこそをかしけれ。かんもり司の者ども、疊取るやおそきと、主殿司の官人ども、手毎に箒とり、砂子ならす。承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子打ちて遊ぶを、疾く出でこなむと待つに、有度濱歌ひて、竹の笆のもとに歩み出でて、御琴うちたる程など、いかにせむとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖を合はせて、二人走り出でて、西に向ひて立ちぬ。つぎつぎ出づるに、足蹈を拍子に合はせては、半臂の緒つくろひ、冠、袍の領など繕ひて、「あやもなき小松」などうたひて、舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。おほわなど舞ふは、日一日見るとも飽くまじきを、果てぬるこそいとくち惜しけれど、又あるべしと思ふは賴もしきに、御琴舁き返して、この度はやがて、竹のうしろよ

り舞ひ出でて、脱ぎ垂れつるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。搔練の下襲など亂れあひて、こなたかなたに渡りなどしたる、いで、更にいへばよのつねなり。この度は、又もあるまじければにや、いみじくこそ果てなむ事はくちをしけれ。上達部なども、續きて出で給ひぬれば、いとさうざうしうぐち惜しきに、賀茂の臨時の祭は、還立の御神樂などにこそ慰められる。庭燎のけぶりの細うのぼりたるに、神樂の笛の面白うわななき、細う吹きすましたるに、歌の聲もいとあはれに、いみじく面白く、寒くさえ氷りて、打ちたる衣もいとつめたう、扇もたる手の冷ゆるも覺えず。才の男ども召して飛び來たるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。里なる時は、ただ渡るを見るに飽かねば、御社まで行きて見る折もあり。大きなる木の許に車立てたれば、松のけぶりたなびきて、火の影に半臂の緒、衣のつやも、晝よりはこよなく勝りて見ゆる。橋の板を蹈みならしつつ、聲合はせて舞ふほどもいとをかしきに、水の流るる音、笛の聲などの合ひたるは、まことに神も嬉しと思し召すらむかし。

○袍の領—襟なり。
○あやもなき小松—駿河舞の一段に「上略—あやもなきこまつがうれに綱な張りそ」とあり。
○おほわ—駿河舞の手の名。
○脱ぎ垂れつる—舞人の右を肩ぬぎて、求子の曲を舞ふをいふ。
○還立—社頭の儀はてて、使舞人等禁中に歸り參り、主上の御前にて、神樂を奏するをいふ。
○庭燎の云云—神樂の夜のさまなり。
○才の男—神樂の歌人をいふ。
○半臂の緒—舞人のなり。

少將といひける人の、年毎に舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御社の、一の橋のもとにあなるを聞けば、ゆゆしう、せちに物思ひ入れじと思へど、なほこのめでたき事をこそ、更にえ思ひ棄つまじけれ。

「八幡の臨時の祭の名殘こそ、いとつれづれなれ。などて還りてまた舞ふ業をせざりけむ。さらばをかしからまし。祿を得て、うしろよりまかづるこそくちぐちしけれ」などいふを、上の御前に聞し召して、「明日還りたらむ、召して舞はせむ」など仰せらるる。「まことにやさぶらふらむ。さらばいかにめでたからむ」など申す。嬉しがりて、宮の御前にも、「なほそれ舞はせさせ給へ」と、集まりて申し惑ひしかば、その度還りて舞ひしは、嬉しかりしものかな。さしもやあらざらむとうちたゆみつるに、舞人御前に召すを聞きつけたる心地、物に當るばかり騒ぐも、いと物ぐるほしく、下にある人人惑ひのぼるさまこそ。人の從者、殿上人などの見るらむも知らず、裳を頭にうち被きてのぼるを、笑ふもことわりなり。

○少將—傳未詳。
○一の橋のもとにあなる—亡魂がなり。

○故殿—道隆。
○世の中に事出でき—花山法皇を射奉りしにより、長徳二年四月二十四日、中宮の御兄弟伊周隆家等流罪に處せられ、中宮は薙髪せられたるをさす。
○左中將—傳未詳。
○黄朽葉—梔子に茜又は紅をまぜたる色。
○紫苑—表は薄色、裏は青。

故殿などおはしまさで、世の中に事出でき、物騒がしくなりて、宮また内にも入らせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたりおぼつかなさにぞ、尚えかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮に參りたれば、いみじく物こそ哀なりつれ。女房の裝束、裳、唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしうても侍るかな。御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、紫苑、萩などをかしう居並みたるかな。御前の草のいと高きを、左中將『などか、これは茂りて侍る。拂はせてこそ』といひつれば、『露置かせて御覽せむとて、こと更に』と、宰相の君の聲にていらへつるなり。をかしくも覺えつるかな。『御里居いと心憂し。かかる所に住居せさせ給はむほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者に思し召されたるかひもなく』など、數多いひつる。語り聞かせ奉れとなめりかし。參りて見給へ。あはれげなる所の樣かな。

○露臺—屋根なき臺。
○左の大殿—左大臣殿。藤原道長のこと。
○知る筋—懇意。
○あなた方—彼方方。敵方。
○左京の君—中宮の女房。
○山吹の花びらを—山吹の花は山梔子色なる故、口無しの意をよせたり。
○いはで思ふぞ—六帖「心にはしたげにいかならむと思ひ參らする御氣色にはあらで、さぶらふ人達の、「左の大殿の方の人、知る筋にてあり」などささめき、さし集ひて物などいふに、下より參るを見てはいひ止み、放ち立てたる樣に、見ならはず憎ければ、「參れ」などある度の仰をもすぐして、げに久しうなりにけるを、宮の邊には、只あなた方になして、虚言なども出で來べし。例ならず仰言などもなくて、月頃になれば、心細く て打ちながむる程に、長女文をもて來たり、「御前より左京の君して、忍びて賜はせたりつる」といひて、ここにてさへひき忍ぶも餘りなり。人傳の仰言にてあらぬなめりと、胸潰れてあけたれば、紙には物も書かせ給はず、山吹の花びらを、只一つ包ませ給へり。それに「いはで思ふぞ」と書かせ給へるを見るもいみじう、日頃の絶間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを、長女

も打ちまもりて、『御前(女房)にはいかに、物の折毎に思し出で聞えさせ給ふなるものを』とて、誰も怪しき御長居(おんながゐ)とのみこそ侍るめれ。などか參らせ給はぬ」などいひて、「長女ここなる所に、あからさまにまかりて參らむ」といひて去ぬる後に、御返事書きて參らせむとするに、この歌の本、更に忘れたり。「清いと怪し。同じ古(ふる)言(こと)といひながら、知らぬ人やはある。ここもとに覺えながら、いひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、小さき童(わらは)の前に居たるが、『下ゆく水の』とこそ申せ」といひたる、などてかく忘れつるならむ。これに教へらるゝもをかし。御返り參らせて、すこし程經て參りたり。いかがと、例よりはつつましうて、御(み)几帳に端(はた)隠れたるを、「宮あれは今參りか」など笑はせ給ひて、「宮にくき歌なれど、この折は、さもいひつべかりけりとなむ思ふを、見つけでは、暫しえこそ慰むまじけれ」など宣はせて、變りたる御(み)氣色もなし。童に教へられし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ひて、「宮さる事ぞ。餘りあなづる古言は、さもありぬべし」など仰せられて、ついでに、「人の謎謎合(あはせ)しける所に、頑にはあらで、さやうの事にらうらうじかりけるが、『左の一番(功者)はおのれいはむ。さ思ひ給へ』など頼むるに、さりともわろき事はいひ出でじと、頼もしく嬉しくて、皆人作り出だし選(え)り定むるに、『その詞(左ノ人)を聞かむ。いかに』など問ふ。『只(功者)まかせて物し給へ。さ申しては、いとくち惜しうはあらじ』といふをげにと推し量る。日いと近うなりぬれば、『なほこの事宣へ。ひざうにをかしき事もこそあれ』といふを、『いさ(功者)知らず。さらばな頼まれそ』などむつかれば、おぼつかなしと思ひながら、その日になりて、皆方人(かたうど)の男女居(ゐ)分けて、殿上人など、よき人人多く居並みて合はするに、左の一番に、いみじう用意してもてなしたる樣の、いかなる事をかいひ出でむと見えたれば、あなたの人もこなたの人も、心もとなく打ちまもりて、『なぞなぞ』といふほど、いと心もとなし。『天に張弓(功者)』といひ出でたり。あなたの方の人は、いと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物も覺えずあさましうなりて、いと憎く愛敬なくて、あなたによりて、殊更に負けさせむとしけるをなど、片時のほどに思ふに、あなたの人鳴滸(をこ)に思ひて、うち笑ひて、『やや(右ノ人)、更に知らず』

ゆく水のわきかへりいけで思ふぞいふにまされる」。
○まづ知るさま―感涙のこぼるるをいふ。古今集に「よの中のうきもつらきもつげなくにまづ知るものは涙なりけり」。

○ひざう―非常の字音。

○天に張弓―上弦又は下弦の月の謎なり。

と、口ひき垂れて散樂しかくるに、『籌させ、籌させ』とて、刺させつ。『いと怪しきこと。これ知らぬもの誰かあらむ。更に籌刺すまじ』と論ずれど、『知らずといひ出でむは、などてか負くるにならざらむ』とて、次ぎ次ぎのも、この人に論じ勝たせける。いみじう人の知りたる事なれど、覺えぬ事はさこそあれ。『何しかは、え知らずといひし』と、後に恨みられて、罪去りける事を語り出でさせ給へば、御前なる限は、『さは思ふべし。くちをしく思ひけむ。こなたの人の心地、うち聞き始めたりけむ、いかに憎かりけむ』など笑ふ。これは忘れたる事かは。皆人知りたる事にや。

○籌させ—勝負の數取の算をさせ。

○罪去り—謝罪。

百二十五段

正月十日、空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに日は、いとけざやかに照りたるに、えせ者の家のうしろ、荒畠などいふものの、土もうるはしう直からぬに、桃の木若だちて、いと楚勝にさし出でたる、片つ方は青く、今片つ方は濃くつややかにて、蘇枋のやうに見えたるに、細やかなる童の狩衣はかけ破りなどして、髪は美しきが登りたれば、また紅梅の衣白きなど引きはこえたる男兒、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、また髪をかしげなるわらはべの、袖ども綻び勝にて、袴は萎えたれど、色などよきうち着たる、三四人、「卯槌の木のよからむ切りておろせ。御前にも召すぞ」などいふに、おろしたれば、走りかひ、取りわき、「われに多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴着たるをのこ走り來て乞ふに、「待て」などいへば、木のもとによりて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかい付きて居るもをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞあるかし。

○はこえ—衣裳を中途に引たむること。

○いで—乞ふ詞。

百二十六段

清げなるをのこの、雙六を日ひと日打ちて、なほ飽かぬにや、短き燈臺に、火をあかくかかげて、敵の賽を請ひせめて、とみにも入れねば、筒を盤のうへに立てて待つ。狩衣の領の顔にかかれば、片手しておし入れて、いとこはからぬ烏帽子を振りやりて、さはいみじう呪ふとも、うち外してむやと、心もとなげに、

○請ひせめ—請ひ祈ること。

うちまもりたるこそ、誇かに見ゆれ。

○拾ひ置く―石をなり。

碁をやむごとなき人の打つとて、紐うち解き、ないがしろなる氣色に、拾ひ置くに、劣りたる人の、居ずまひも畏まりたる氣色に、碁盤よりは少し遠くて、及びつつ、袖の下、いま片手にて引きやりつつ、打ちたるもをかし。

百二十七段

○椽のかさ―どんぐりの笠。

恐ろしきもの　椽のかさ。燒けたる所。茨。菱。髪多かるをのこの頭洗ひて干すほど。栗のいが。

百二十八段

清しと見ゆるもの　土器。新しき鋺。疊にさす薦。水を物に入るる透影。新しき細櫃。

百二十九段

○つきはな―瘡。

きたなげなるもの　鼠のすみか。つとめて手おそく洗ふ人。白きつきはな。すすばなしありく乳兒。油入るる物。雀の子。暑きほどに久しく湯浴みぬ。

○爵―五位に叙せらるゝをいふ。式部丞は六位藏人を勤務し、殿上おる時五位に叙せらる。故にこの五位は卑しきなり。

○おそひ―卽ち疫なり。

○法師子―僧體になれる小兒。

衣の萎えたるは、何れも何れもきたなげなる中に、練色の衣こそきたなげなれ。

百三十段

いやしげなるもの　式部の丞の爵。黑き髪の筋太き。布屏風の新しき、舊り黑みたるは、さるいふかひなき物にて、なかなか何とも見えず。新しくし立てて、櫻の花多く咲かせて、胡粉、朱砂など色どりたる繪かきたる。遣戸、厨子、何も田舍物はいやしきなり。莚張の車のおそひ。檢非違使の袴。伊豫簾の筋太き。人の子に法師子の太りたる。まことの出雲莚の疊。

百三十一段

○世の中など騷がしき―流行病のあるをいふ。

胸潰るるもの　競馬見る。元結縒る。親などの心地惡しうして、例ならぬ氣色なる。まして世の中など騷がしき頃、よろづの事覺えず。又、物いはぬ乳兒の泣き入りて乳も飲まず、いみじく、乳母のいだくにもやまで、久しう泣きたる。例の所などにて、殊に又いちじるからぬ人の聲聞き付けたるはことわり、人などのその上などいふに、まづこそ潰るれ。いみじく憎き人の來たるも、い

みじくこそあれ。夜べきたる人の今朝の文の遅き、聞く人さへ潰る。思ふ人の文取りてさし出でたるも、また潰る。

百三十二段

うつくしきもの　ふりに描きたる乳児の顔。雀の子のねずなきするに躍りくる。又、へにつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくくむる、いとらうたし。三つばかりなる乳児の、急ぎて這ひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびに捉へて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたる乳児の、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。襷がけに結ひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞき立てられてありくもうつくし。をかしげなる乳児の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池より取りあげて見る。葵の小さきも、いとうつくし。何も何も小さき物は、いと

○ふり—うり。瓜。
○ねずなき—鼠鳴。
○へに—(へ)に。へは綜緒卽ち足緒。
○くゝむる—含むる。
○尼にそぎたる—かぶろに髪を切りたるをいふ。
○さうぞき—裝束の字音を活用したる語。

うつくし。いみじう肥えたる乳児の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の羅など、衣長くて、襷あげたるが這ひ出でくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。鷄の雛の足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよひよとかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親の許に連れ立ちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

百三十三段

人ばへするもの　殊なる事なき人の子の、かなしくしならはされたる。咳嗽。恥かしき人に物いはむとするにも、まづ先に立つこそ怪しけれ。あなたこなたに住む人の子供の四つ五つなるが、あやにくだちて、物など取り散らして損ふを、常は引き張られなど制せられて、心のままにもえあらぬが、親のきたるに所えて、ゆかしがりける物を、「あれ見せよや、母」など引きゆるがすに、大人など物いふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引きさがし出でて見るこそ、いと憎

○舍利—佛骨。
○人ばへ—人そばへ。調子にのりて增長する。
○かなしく—かはゆく。

けれ。それを「まさな」とばかり打ちいひて、取り隠さで、さなせそ。損ふな」とばかり笑みていふ親も憎し。我えはしたなくもいはで見るこそ心もとなけれ。

○鱈板—端板の義。
○ふさう雲—不祥雲。
○ほこ星—破軍星。
○かさめ—蟹の一種。擁剣。
○肱笠雨—俄雨をいふか。
○いりすみ—入墨。
○牛鬼—佛説に見ゆる牛頭の鬼。

百三十四段

名恐ろしきもの　青淵。谷の洞。鱈板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじう恐ろし。暴風。ふさう雲。ほこ星。狼。牛。かさめ。牢。籠の長。錨。それも名のみならず、見るも恐ろし。繩莚。強盗、またよろづに恐ろし。肱笠雨。蛇苺。生霊。鬼薑。鬼薇蕨。荆棘。枳殼。いりずみ。牡丹。牛鬼。

百三十五段

見るに異なる事なきものの、文字に書きて事事しきもの　覆盆子。鴨跖草。芡。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫。楊梅。いたどりはまして、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔付を。

百三十六段

むつかしげなるもの　ぬひ物の裏。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、

○ぬひ物—刺繍。

巣の中より數多まろばし出でたる。裏まだ付かぬ皮衣の縫目。ことに清げならぬ所のくらき。殊なる事なき人の、小さき子どもなど、數多持ちてあつかひたる。いと深うしも志なき女の、心地惡しうして久しく惱みたるも、男の心の中にはむつかしげなるべし。

○大根—齋固に用ふ。
○ひめまうちぎみ—姫大夫君。東豎子。姫松ともいふ。行幸に馬にのりて供奉する少女。
○節折の藏人—二季の大祓の夜、竹にて、主上の御寸法をはかり奉る女藏人。
○御裝束—飾付。
○あゆみ—官吏の練りあるくこと。
○藥子—元旦の御屠蘇をまづ嘗めしむる童女。
○卯杖の法師—天

百三十七段

えせものの所うる折のこと　正月の大根。行幸の折のひめまうちぎみ。六月、十二月の晦日の節折の藏人。季の御讀經の威儀師、赤袈裟着て、僧の文ども讀みあげたる、いとらうらうし。御讀經、御佛名などの御裝束の所の衆。春日祭の舍人ども。大饗の所のあゆみ。正月の藥子。卯杖の法師。五節のこころみの御髪上。節會の御陪膳の采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡する折のかん取。

百三十八段

苦しげなるもの　夜泣といふものする乳兒の乳母。思ふ人二人もちて、こなた

合眞言宗より奉る卯杖の法師。
○御髪上―五節の舞姫に隨ふ髪上の童女。
○史生―太政官の書記。大嘗の時は列立す。

かなたに恨みふすべられたる男。こはき物の怪あづかりたる驗者、驗だに早くはよかるべきを、さしもなきを、さすがに人笑はれにあらじと念ずる、いと苦しげなり。わりなく物疑ひする男に、いみじう思はれたる女。一の所に時めく人も、え安くはあらねど、それはよかめり。心苛られしたる人。

百三十九段

羨ましきもの　經など習ひて、いみじうたどたどしくて忘れ勝にて、返す返す同じ所を讀むに、法師はことわり、男も女も、くるくると安らかに讀みたるこそあれがやうに、いつの世にあらむと覺ゆれ。心地など煩ひて臥したるに、うち笑ひ物いひ、思ふ事なげにて歩みありく人こそ、いみじく羨ましけれ。稲荷に思ひおこして參りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じてのぼる程に、いささか苦しげもなく、後れて來と見えたる者どもの、只ゆきに先立ちて詣づる、いと羨まし。二月午の日の曉に急ぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりにけり。やうやう暑くさへなりて、まことにわびしう、

○稲荷―伏見の稲荷。

かからぬ人も世にあらむものを、何しに詣でつらむとまで、涙落ちて休むに、三十餘ばかりなる女の、壺裝束などにはあらで、ただ引きはこへたるが、「まろは七たび詣し侍るぞ。三度はまうでぬ。四度はことにもあらず。未には下向しぬべし」と、道に逢ひたる人にうちいひて、くだり往きしこそ、ただなる所にては、目もとまるまじき事の、かれが身に只今ならばやと覺えしか。

男も、女も、法師も、よき子持ちたる人、いみじう羨まし。髪長くうるはしう、さがり端などめでたき人。やむごとなき人の、人にかしづかれ給ふも、いと羨まし。手よく書き、歌よく詠みて、物の折にもまづ取り出でらるる人。よき人の御前に、女房いと數多さぶらふに、心にくき所へ遣はすべき仰書などを、誰も鳥の跡などのやうには、などかはあらむ。されど、下などにあるを、わざと召して、御硯おろして書かせさせ給ふ羨まし。さやうの事は、所のおとななどになりぬれば、まことに難波わたりの遠からぬも、事に隨ひて書くを、これさはあらで、上達部のもと、又始めて參らむなど申さする人の女などには、ことに、紙よ

○さがり端―額髪の下りたる端。
○鳥の跡―下手なる手跡の形容。
○難波わたりの遠からぬ―あし手をいふ。卽ち惡筆なり。

り始めて繕はせ給へるを、集まりて、たはぶれにねたがりいふめり。琴笛習ふに、さこそはまだしき程は、かれがやうにいつしかと覺ゆめれ。内、東宮の御乳母。上の女房の御方方ゆるされたる。三昧堂建てて、宵曉に祈られたる人。雙六うつに、敵の賽ききたる。まことに世を思ひすてたる聖。

○三昧堂―法華三昧を修する堂。

百四十段

疾くゆかしきもの　卷染、村濃、くくり物など染めたる。人の子産みたる、男女とく聞かまほし。よき人は更なり、えせ者、下衆の際だに聞かまほし。除目のまだつとめて、必ず知る人のなるべきをりも聞かまほし。思ふ人のおこせる文。

○くくり物云云―くくり染のこと。

百四十一段

心もとなきもの　人の許に、とみの物縫ひにやりて待つほど。物見に急ぎ出でて、今や今やと苦しう居入りつつ、あなたをまもらへたる心地。子産むべき人の、ほど過ぐるまでさる氣色のなき。遠き所より、思ふ人の文を得て、固く封じたる續飯など放ちあくる心もとなし。物見に急ぎ出でて、「事なりにけり」とて、白き笞など見つけたるに、近く遣り寄するほどわびしう、下りても去ぬべき心地こそすれ。知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物いはせたる。いつしかと待ち出でたる乳兒の、五十日、百日などの程になりたる、行末いと心もとなし。とみの物縫ふに、暗きをり針に絲つくる。されど、我はさるものにて、ありぬべき所を捉へて、人につけさするに、それも急げばにやあらむ、とみにもえさし入れぬを、「いで、只なすげそ」といへど、さすがになどてかはと思ひ顔にえ去らぬは、憎ささへ添ひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ行く折、まづ我がさるべき所へ行くとて、只今おこせむとて出でぬる車待つほどこそ心もとなけれ。大路いきけるを、さなりけると喜びたれば、外ざまに去ぬる、いとくちをし。まして物見に出でむとてあるに、「事はなりぬらむ」などいふを聞くこそわびしけれ。子生みける人の、後のこと久しき。物見に、又、御寺詣などに、諸共にあるべき人を乗せにいきたるを、車さし寄せ立てるが、とみにも乗らで待たするも、

○續飯―飯粒を練りて作れる糊。
○事なりにけり―事の現實になりたるにて、祭の行列の來れるをいふ。
○白き笞―白き杖。看督長の警固の爲にもてる長き杖。
○五十日、百日―いづれも生兒の祝日。
○後のこと―後產。

○煎炭―固炭の類か。

いと心もとなく、うち捨てても去ぬべき心地する。とみに煎炭おこす、いと久し。人の歌の返し疾くすべきを、え詠み得ぬほど、いと心もとなし。懸想人などはさしも急ぐまじけれど、おのづから又さるべき折もあり。又、まして女も男も、ただにいひかはす程は、疾きのみこそはと思ふほどに、あへなく僻事も出でくるぞかし。又、心地悪しく物恐ろしきほど、夜の明くる待つこそ、いみじう心もとなけれ。また、歯黒めの乾るほども心もとなし。

○御服の頃―道隆の薨後。一年の忌服ある也。
○官のつかさのあいたん所―太政官廳の朝所。朝所は参議以上の人の食事する所。あいたんはあしたの音便。

百四十二段

故殿の御服の頃、六月晦日の御祓といふ事に出でさせ給ふべきを、職の御曹司は方あしとて、官のつかさのあいたん所に渡らせ給へり。その夜はさばかり暑くわりなき闇にて、何とも覚えず、せばうおぼつかなくて明しつ。つとめて見れば、屋の様いとひらに短く、瓦葺にて唐めき、さま異なり。例のやうに格子などもなく、只めぐりて、御簾ばかりをぞ掛けたる、なかなか珍しうをかし。女房庭に下りなどして遊ぶ。前栽には、萱草といふ草を、ませ結ひて、いと多く植

○萱草―わすれ草。

ゑたりける。花きはやかに重なりて咲きたる、うべうべしき所の前栽にはよし。時づかさなどはただ傍にて、鐘の音も例には似ず聞ゆるを、ゆかしがりて、若き人人二十餘人ばかり、そなたに行きて走り寄り、高き屋に登りたるを、これより見上ぐれば、薄鈍の裳、唐衣、同じ色の單衣襲、紅の袴どもを着てのぼり立ちたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空より下りたるにやとぞ見ゆる。同じ若さなれど、おしあげられたる人はえまじらで、羨ましげに見あげたるもをかし。日暮れて暗紛れにぞ、すぐしたる人人、皆立ちまじりて、陣へ物見に出できて、たはぶれ騒ぎ笑ふもあめりしを、「かうはせぬ事なり。上達部の著き給ふいしなどに、女房どものぼり、上官などの居る床子を、皆打ち倒し損ひたり」など、苦しがる者もあれど、聞きも入れず。屋のいと舊くて、瓦葺なればにやあらむ、暑さの世に知らねば、御簾の外に、よるも臥したるも、舊き所なれば、蜈蚣といふもの、日ひと日落ちかかり、蜂の巣の大きにて、附き集まりたるなど、いと恐ろしき。殿上人日ごとに參り、よるも居明し、物いふを聞きて、「あ

○時づかさ―漏刻司。時守ありて、漏刻を見て、毎時鐘鼓を鳴して、時を報ず。
○おしあげられたる―地位の高き。
○いし―倚子。

○今やかうのには―今や歌舞の場にて、うは「ふ」の誤寫ならん。
○かたへ涼しからぬ風―古今集「夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへ涼しき風やふくらむ」。

に料りきや、太政官の地の、今やかうのにはとならむことを」と誦し出でたりし人こそをかしかりしか。秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所柄なめり。さすがに蟲の聲などは聞えたり。八日ぞ還らせ給へば、七夕祭などにて、例より近う見ゆるは、程のせばければなめり。

百四十三段

宰相中將齊信、宣方の中將と參り給へるに、人人出でて物などいふに、ついでもなく、「明日はいかなる詩をか」といふに、いささか思ひめぐらし、滯りもなく、「人間の四月をこそは」といらへ給へる、いみじうをかしくこそ。過ぎたる事なれど、心得ていふはをかしき中にも、女房などこそさやうの物忘はせね、男はさもあらず。詠みたる歌をだに生覺なるを、まことにをかし。內なる人も、外なる人も、心得ずと思ひたるぞことわりなるや。

○人間の四月―白居易の詩に「人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、長恨春歸無覓處、不知轉入此中來、云云」。

百四十四段

この三月晦日、細殿の一の口に、殿上人あまた立てりしを、やうやうすべり失せ

○細殿の一の口―弘徽殿のなり。

○頭の中將―齊信。
○源中將―宣方。
○露は別の―菅原道眞の七夕の詩に「露應別淚珠空落、雲是殘粧髻未成、云云」。

などして、ただ頭の中將、源中將、六位一人殘りて、よろづの事いひ、經よみ歌うたひなどするに、「明け果てぬなり。歸りなむ」とて、「露は別の涙なるべし」といふことを、頭の中將うち出だし給へれば、源中將もろ共に、いとをかしう誦んじたるに、「いそぎたる七夕かな」といふを、いみじうねたがりて、「曉の別のすぢの、ふと覺えつるままにいひて、わびしうもある業かな。すべてこのわたりにては、かかる事思ひまはさずいふは、くち惜しきぞかし」などいひて、あまりあかくなりにしかば、「葛城の神、今ぞすぢなき」とて、分けておはしにしを、七夕の折、この事をいひ出でばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必しもいかでかは、その程に見つけなどせむ。文書きて、主殿司してやらむなど思ひし程に、七日に參り給へりしかば、嬉しくて、その夜の事などいひ出でば、心もぞ得給ふ、すずろにふといひたらば、怪しなどうちかたぶき給はむ、さらばそれには、ありし事いはむとてあるに、つゆおぼめかでいらへ給へりしかば、誠にいみじうをかしかりき。月頃いつしかと思ひ侍りしだに、わが心ながらすきずきしと

○葛城の神云云―「晝はかたちあしとて」を見よ。
○宰相になり―參議となるときは、上達部なれば、侍臣の如く日勤せぬなり。

覺えしに、いかでさはた思ひ設けたるやうに宣ひけむ。諸共にねたがりいひし中將は、思ひも寄らで居たるに、「頭中將ありし曉の詞いましめらるるは知らぬか」と宣ふにぞ、「源中將げにげに」と笑ふめる、わろしかし。人と物いふを碁になして、近う語らひなどしつるをば、「手許してけり」、「けちさしつ」などいひ、をとこはてうけん」などいふことを、人には知らせず、この君と心得ていふを、「何事ぞ何事ぞ」と、源中將は添ひつきて問へど、いはねば、かの君に、「なほこれ宣へ」と怨みられて、よき中なれば聞かせてけり。いとあへなく近うなりぬるをば、「おしこぼちの程ぞ」などいふに、我も知りにけると、いつしか知られむとて、わざと呼び出でて、「源中將碁盤侍りや。まろも打たむと思ふはいかが。手は許し給はむや。頭の中將とひとし碁なり。な思し分きそ」といふに、「清さのみあらば、定めなくや」といらへしを、かの君に語り聞えければ、「頭中將嬉しくいひたる」と喜び給ひし。なほ過ぎたる事忘れぬ人は、いとをかし。

宰相になり給ひしを、上の御前にて、「清詩をいとをかしう誦んじ侍りしものを、

○碁になして—碁の手に譬へて。
○けち—結。
○てうけん—手受の訛。
○おしこぼち—押毀ち。
○定め—定目。

『蕭會稽の古廟を過ぎし』なども、誰かいひ侍らむとする。暫しならでもさぶらへかし。くち惜しきに」など申ししかば、いみじう笑はせ給ひて、「さなむいふとて、なさじかし」など仰せられしもをかし。されどなり給ひにしかば、誠にさうざうしかりしに、源中將劣らずと思ひて、故だちありくに、宰相中將の御うへをいひ出でて、「清いまだ三十の期に及ばず』といふ詩を、異人には似ずをかしう誦んじ給ふ」などいへば、「源中將などかそれに劣らむ。勝りてこそせめ」とて詠むに、「清更にわろくもあらず」といへば、「源中將わびしの事や。いかであれがやうに誦んぜで」など宣ふ。「清三十の期といふ所なむ、すべていみじう愛敬づきたりし」などいへば、ねたがりて笑ひありくに、陣に著き給へりける折に、分きて呼び出でて、「源中將かうなむいふ。なほそこ教へ給へ」といひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局のもとにて、いみじくよく似せて詠むに、怪しくて、「清こは誰ぞ」と問へば、笑み聲になりて、「源中將いみじき事聞えむ。かうかう、昨日陣に著きたりしに問ひ聞きたるに、まづ似たるなめり。『清誰ぞ』と、憎からぬ氣色にて問ひ給ふは」といふも、

○蕭會稽の—朗詠集に大江朝綱「蕭會稽之過二古廟一、託締二異代之交一云云」。蕭會稽は梁の蕭允のこと。會稽を鎮めて、季札の廟を祭りしことあり。
○ならでも—宰相にならでも。
○いまだ三十の云云—本朝文粹に源英明「顔回周賢者、未レ至二三十期一、潘岳晉名士、早著二秋興詞一云云」。

わざとさ習ひ給ひけむをかしければ、これだに聞けば、出でて物などいふを、「宰相中将の徳見ること。そなたに向ひて拝むべし」などいふ。下にありながら、「うへに」などいはするに、これをうち出づれば、「まことにはあり」などいふ。御前に「かく」など申せば笑はせ給ふ。

内の御物忌なる日、右近のさうくわんみつ何とかやいふ者して、畳紙に書きておこせたるを見れば、「参せむとするを、今日は御物忌にてなむ。『三十の期に及ばず』はいかが」といひたれば、返事に、「その期は過ぎぬらむ。朱買臣が妻を教へけむ年にはしも」と書きて遣りたりしを、又ねたがりて、上の御前にも奏しければ、宮の御方に渡らせ給ひて、「いかでかかる事は知りしぞ。『四十九になりける年こそ、さはいましめけれ』とて、宣方は、『わびしういはれにたり』といふめるは」と笑はせ給ひしこそ、物ぐるほしかりける君かなと覺えしか。

○さうくわん―さくわんの音便。

○朱買臣が云云―前漢書の朱買臣の傳に「妻羞レ之求レ去、買臣笑曰、我年五十當二富貴一、今已四十餘矣、女苦日久、待二我富貴一報二女功一云云」。

百四十五段

弘徽殿とは、閑院の左大将の女御をぞ聞ゆる。その御方に、うちふしといふ者の女、左京といひてさぶらひけるを、源中将語らひて思ふなど、人人笑ふ頃、宮の職におはしまいしに参りて、「時時は御宿直など仕うまつるべけれど、さるべきさまに、女房などもてなし給はねば、いと宮仕おろかにさぶらふ。宿直所をだに賜はりたらば、いみじうまめにさぶらひなむ」などいひ居給ひつれば、人人、「げに」などいふ程に、「まことに人は、うちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたりには、繁く参り給ふなるものを」とさしいらへたりとて、「すべて物聞えじ。方人と頼み聞ゆれば、人のいひ舊したる様に取りなし給ふ」など、いみじうまめだちて怨み給ふ。「あな怪し。いかなる事をか聞えつる。更に聞きとどめ給ふことなし」などいふ。傍なる人を引きゆるがせば、「さるべき事もなきを」ほとほり出で給ふ。さまこそあらめ」とて花やかに笑ふに、「これもかのいはせ給ふならむ」とて、いと物しと思へり。「更にさやうの事をなむいひ侍らぬ。人のいふだに憎きものを」といひて引き入りにしかば、後にもなほ、「人に恥ぢがましき事いひつけたる」と怨みて、「殿上人の笑ふとて、いひ出でたるなり」と宣

○弘徽殿―一條帝の女御。藤原義子。

○閑院の左大将―藤原公季。

○ほとほり―憤り。

○物し―癪にさはる。

へば、「清さては一人を恨み給ふべくもあらざめる。あやし」などいへば、その後は絶えてやみ給ひにけり。

百四十六段

昔覺えてふようなるもの　繧繝縁の疊の舊りてふし出できたる。唐繪の屏風の表損はれたる。藤の懸かりたる松の木枯れたる。地摺の裳の花かへりたる。繪師の目くらき。几帳の帷子の舊りぬる。帽額のなくなりぬる。七尺の髪のあかくなりたる。蒲萄染の織物の灰かへりたる。色好の老いくづをれたる。面白き家の木立燒けたる。池などはさながらあれど、浮草水草茂りて。

百四十七段

賴もしげなきもの　心みじかくて人忘れ勝なる。壻の夜がれ勝なる。六位の頭白き。虚言する人の、さすがに人の事なし顔に、大事受けたる。一番に勝つ雙六。六七八十なる人の、心地惡しうして日頃になりぬる。風吹くに帆あげたる船。

○繧繝―白地に色絲を以て花形などおり出したるもの。
○花かへりたる―花色の褪めたる。
○髪―かもじ。
○灰かへり―すべて紫色の褪めたるをいふ。紫を染むるに灰汁を用ひしなり。
○夜がれ勝―男の通ふことの絶間がち。夜がれは夜離（カレ）の義。

百四十八段

經は　不斷經。

百四十九段

近くて遠きもの　宮のほとりの祭。思はぬはらから、親族の中。鞍馬のつづらをりといふ道。十二月のつごもり、正月ついたちのほど。

百五十段

遠くて近きもの　極樂。船の道。男女の中。

百五十一段

井は　掘兼の井。走井は逢坂なるがをかしき。山の井、さしも淺きためしになりはじめけむ。飛鳥井、「みもひも寒し」と譽めたるこそをかしけれ。玉の井。少將の井。櫻井。后町の井。千貫の井。

百五十二段

受領は　紀伊守。和泉。

○不斷經―晝夜不斷に經典を讀誦すること。
○鞍馬―山城の鞍馬山。
○淺きためし―萬葉集に采女「淺香山影さへみゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」。
○みもひも―催馬樂に「飛鳥井にやどりはすべし。かげもよしかげもよし。みもひもさむしみま草もよし」。

○やどりのつかさ―宿官。他に轉任せしむるまで、一時任じおく官。

○式部の大夫―五位の式部丞。
○左衛門の大夫―五位の左衛門尉。
○史の大夫―五位の左大史。史は太政官の文書など掌る役人。

○官待ち出でて―よき官職を待得て。

百五十三段

やどりのつかさの權の守は　下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

百五十四段

大夫は　式部の大夫。左衛門の大夫。史の大夫。六位の藏人、思ひかくべき事にもあらず。かうぶり得て、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋などのせばき家もたりて、また小檜垣など新しくし、車やどりに車引きたて、前近く木多くして、牛繋がせて、草など飼はするこそ、いと憎けれ。庭いと清げにて、紫革して伊豫簾懸けわたして、布障子など張りてすまひたる。よるは、「門つよくさせ」など、事行ひたる、いみじうおひさきなく、心づきなし。親の家、舅はさらなり、をぢ兄などの住まぬ家、そのさるべき人のなからむは、おのづから、睦まじううち知りたる受領の、國へ行きていたづらなる、さらずは女院、宮腹などの屋數多あるに住みなどして、官待ち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて、住みたるこそよけれ。

百五十五段

女のひとり住む家などは、只いたう荒れて、築土などもまたからず、池などのある所は、水草ゐ、庭なども、いと蓬茂りなどこそせねども、所所砂子の中より青き草見え、寂しげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたう固め、際際しきは、いとうたてこそ覺ゆれ。

百五十六段

宮仕人の里なども、親ども二人あるはよし。人しげく出で入り、奥の方に、數多さまざまの聲おほく聞え、馬の音して騒がしきまであれど、とがもなし。されど、忍びてもあらはれても、「おのづから出で給ひけるを知らで」とも、「又いつか參り給ふ」なども、いひにさし覗く。心がけたる人は、いかがはと、門あけなどするを、うたて騒がしうあやふげに、夜中までなど思ひたる氣色、いと憎し。「大御門はさしつや」など問はすれば、「まだ人のおはすれば」など、なまふせがしげに思ひていらふるに、「人出で給ひなば疾くさせ。この頃は盗人いと多かり」など

○なまふせがしげ―小邪魔なるやうに。

いひたる、いとむつかしう、うち聞く人だにあり。この人の供なる者ども、この客今や出づると、絶えずさし覗きて、氣色見る者どもを笑ふべかめり。まねうちするも聞かば、いかにいとど嚴しういひ咎めむ。いと色に出でていはぬも、思ふ心なき人は、必ず來などやする。されど、すくよかなる方は、「夜更けぬ。御門もあやふかなる」といひて去ぬるもあり。まことに志殊なる人は、「はや」など、數多たび遣らはるれど、なほ居あかせば、度度ありくに、あけぬべき氣色を珍かに思ひて、「いみじき御門を、今宵らいさうとあけ廣げて」と聞えごちて、あちきなく曉にぞさすなる。いかが憎き。親添ひぬるは、なほこそあれ。まして まことならぬは、いかに思ふらむとさへつつましうて。兄人の家なども、けにくうはさぞあらむ。夜中曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、内わたりの殿ばらなる人人の出であひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居あかして、人の出でぬる後も、見出だしたるこそをかしけれ。在明などは、ましていとをかし。笛など吹きて出でぬるを、我は急ぎても寢られず、人のうへな

○らいさうと—未詳。

どもいひ、歌など語り聞くままに、寢入りぬるこそをかしけれ。

百五十七段

雪のいと高くはあらで、薄らかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又、雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端近う、同じ心なる人二三人ばかり、火桶中にするゑて、物語などする程に、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光、いとしろう見えたるに、火箸して灰など掻きすさびて、あはれなるもをかしきも、いひ合はするこそをかしけれ。宵も過ぎぬらむと思ふほどに、履の音近う聞ゆれば、怪しと見出だしたるに、時時かやうの折、覺なく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにと思ひ聞えながら、何でふ事に障り、その所に暮しつるよしなどいふ。「今日こむ人を」などやうの筋をぞいふらむかし。晝よりありつる事どもをうち始めて、よろづの事をいひ笑ひ、圓座さし出だしたれど、片つ方の足は下ながらあるに、鐘の音の聞ゆるまでになりぬれど、内にも外にもいふ事どもは、飽かずぞ覺ゆる。あけぐれの程に歸るとて、「雪なにの山に

○今日こむ人を—拾遺集に「山里は雪ふりつみてみちもなしけふこむ人をあはれとも見む」。

○あけぐれ—夜明けごろ。

○雪なにの山云云—朗詠集に謝觀「曉入梁王之苑、雪滿群山」云云」。

○やうき—様器、また楊器。貞丈雜記には、楊にて作れる折敷かといへり。

○雪月花の時—白氏文集に「琴詩酒友皆抛レ我、雪月花時最憶レ君」。

○おき—沖に熾火(オキ)をかく。

○かへる—歸るに蛙をかく。

○御形の宣旨—女房の名。

○ともあきらのおほきみ—人形の名。

○大殿油—おほとなぶらに同じ。

滿てり」とうち誦んじたるは、いとをかしきものなり。女の限しては、さもえ居あかさざらましを、ただなるよりはいとをかしう、好きたる有樣などをいひ合はせたる。

百五十八段

村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、やうきに盛らせ給ひて、梅の花をさして、月いと明きに、「これに歌詠め。いかがいふべき」と、兵衞の藏人に賜びたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌など詠まむには世のつねなり。かう折にあひたる事なむいひ難き」とこそ仰せられけれ。

おなじ人を御供にて、殿上に人さぶらはざりける程、佇ませおはしますに、炭櫃のけぶりの立ちければ、「かれは何のけぶりぞ。見てこ」と仰せられければ、見て返り參りて、

「わたつみのおきにこがるる物見ればあまの釣してかへるなりけり。

と奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りて焦がるるなりけり。

百五十九段

御形の宣旨、五寸ばかりなる殿上童の、いとをかしげなるを作りて、鬟結ひ、裝束などうるはしくして、名書きて獻らせたりけるに、「ともあきらのおほきみ」と書きたりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

百六十段

宮に始めて參りたる頃、物恥かしき事數知らず、涙も落ちぬべければ、夜夜參りて、三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手も得さし出づまじうわりなし。「これはとあり、かれはかかりなど宣はするに、高坏に參りたる大殿油なれば、髮の筋なども、なかなか晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じて見なす。いと冷たき頃なれば、さし出ださせ給へる御手の僅に見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限なくめでたしと、見知らぬさとび心地には、いかがは、かかる人こそ世におはしましけれと、驚かる

るまでぞまもり參らする。曉には疾くなど急がるる。「宮葛城の神も暫し」など仰せらるるを、いかで筋かひても御覽せられむとて臥したれば、御格子もまゐらず。女官參りて、「これ放たせ給へ」といふを、女房聞きて放つを、「宮待て」など仰せらるれば、笑ひて返りぬ。物など問はせ給ひ、宣はするに、久しうなりぬれば、「宮下りまほしうなりぬらむ。さははや」とて、「宮夜さりは疾く」と仰せらるる。ゐさり歸るやおそきと、あけ散らしたるに、雪いとをかし。「宮今日は晝つ方參れ。雪に曇りてあらはにもあるまじ」など、たびたび召せば、この局あるじも、「さのみや籠り居給ふらむとする。いとあへなきまで、御前許されたるは、思し召すやうこそあらめ。思ふにたがふは憎きものぞ」と、只急がしに急がせば、我にもあらぬ心地すれば、參るもいとぞ苦しき。火燒屋のうへに降り積みたるも、珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それにはわざと人も居ず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに向ひておはします。上蘆御まかなひし給ひけるままに、近くさぶらふ。次の間に、長炭櫃に間なく居たる人人、唐衣

○沈—香木の名。
○梨繪—梨地の蒔繪。

着垂れたるほど、慣れ安らかなるを見るも羨ましく、御文取り次ぎ、立ち居振舞ふさまなど、つつましげならず、物いひゐ笑ふ。いつの世にか、さやうに交らひならむと思ふさへぞつつましき。おうよりて、三四人つどひて、繪など見るもあり。

○おうよりて—奥寄りて。

暫しありて、前高うおふ聲すれば、「女房殿參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども取り遣りなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳の綻より、わづかに見入れたり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映えてをかし。柱のもとに居給ひて、「大納言昨日けふ物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、おぼつかなさに」など宣ふ。「宮道もなしと思ひけるに、いかでか」とぞ御いらへあなる。うち笑ひ給ひて、「大納言あはれともや御覽ずるとて」など宣ふ御有樣、これよりは何事かまさらむ。物語にいみじう口に任せていひたる事ども、たがはざめりと覺ゆ。宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる。御髪の懸からせ給へるなど、繪に描きたるをこそ、かかる事は見るに、

○火納言殿—伊周。
○道もなし—今日こむ人を見よ。
○あはれともや—同上。
○唐綾—支那より舶來の綾。

現にはまだ知らぬを、夢の心地ぞする。女房と物いひ、たはぶれなどし給ふを、いらへいささか恥かしとも思ひたらず。聞え返し、虚言など宣ひかくるを、爭ひ論じなど聞ゆるは、目もあやにあさましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御果物まゐりなどして、御前にも參らせ給ふ。

「御几帳のうしろなるは、誰そ」と問ひ給ふなるべし。「さぞ」と申すにこそあらめ、立ちておはするを、外へにやあらむと思ふに、いと近う居給ひて、物など宣ふ。まだ參らざりし時、聞き置き給ひける事など宣ふ。「まことにさやありし」など宣ふに、御几帳隔てて、よそに見やり奉るだに恥かしかりつるを、いとあさましう、さし向ひ聞えたる心地、現とも覺えず。行幸など見るに、車の方に、いささか見おこせ給ふは、下簾ひき繕ひ、透影もやと扇をさし隱す。なほいとわが心ながらもおほけなく、いかで立ち出でにしぞと、汗あえていみじきに、何事をか聞えむ。かしこき陰と捧げたる扇をさへ取り給へるに、振りかくべき髪のあやしささへ思ふに、すべてまことに、さる氣色もこそ見ゆらめ。疾く立ち給はなむなど思へど、扇を手まさぐりにして、「繪は誰が描きたるぞ」など宣ひて、とみにも起ち給はねば、袖を押しあててうつ伏し居たるも、唐衣に白い物うつりて、斑にならむかし。久しう居給ひたりつるを、心なう苦しと思ふらむと、心得させ給へるにや、「これ見給へ。これは誰が書きたるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに、「賜はりて見侍らむ」と申し給へば、「なほここへ」と宣はすれば、「人を捉へてたて侍らぬなり」と宣ふ。いといまめかしう、身のほど年には合はず、かたはら痛し。人の草假字書きたる草子取り出でて御覽ず。「誰がにかあらむ。かれに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見知りて侍らむ」と、怪しき事どもを、只いらへさせむと宣ふ。

一所だにあるに、又前打ち追はせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し花やぎ、散樂言など打ちし給ふを、譽め笑ひ興じ、我もなにがしがとある事、かかる事など、殿上人のうへなど申すを聞けば、なほいと變化の物、天人などの下りくるにやと覺えしを、さぶらひ馴れ、日頃過ぐれば、いとさしもなき業にこそ

ありけれ。かく見る人人も、家の内いで初めけむ程は、さこそは覺えけめど、かくしもて行くに、おのづから面馴れぬべし。

物など仰せられて、「宮われをば思ふや」と問はせ給ふ。御いらへに、「清いかにかは」と啓するに合はせて、臺盤所の方に、鼻を高くひたれば、「宮あな心う。虚言するなりけり。よしよし」とて入らせ給ひぬ。いかでか虚言にはあらむ。よろしうだに思ひ聞えさすべき事かは。鼻こそは虚言したれと覺ゆ。さても誰か、かく憎き業しつらむと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おし拉ぎ返してあるを、まして憎しと思へど、まだ初ひ初ひしければ、ともかくも啓し直さで、明けぬれば下りたるすなはち、淺綠なる薄樣に、艶なる文をもてきたり。見れば、

『宮いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば』

となむ、御氣色は」とあるに、めでたくもくち惜しくも思ひ亂るるに、なほ夜べの人ぞ尋ね聞かまほしき。

○ただすの神―下賀茂の神なり。糺すをよせたり。

○職の神―また式神。陰陽師の使役する鬼神。

○鼻ひ―四分律に「時世尊嚏、諸比丘呪願言=長壽=」とあり。

○きしろふ度―競爭者のある時。

○ゐふたぎ―掩韻。ゐんふたぎ。詩の韻脚を掩ひて當てさする遊戯。

○ふくつけき―慾張りたる。

「清きこそそれにもよらめはな故にうき身の程を知るぞわびしき。

なほこればかりは啓し直させ給へ。職の神も、おのづからいと畏し」とて、參らせて後も、うたて折しも、などてさはたありけむと、いと歎かし。

百六十一段

したり顔なるもの　正月一日のつとめて、最初に鼻ひたる人。きしろふ度の藏人に、かなしうする子なしたる人の氣色。除目に、その年の一の國得たる人の、よろこびなどいひて、「いとかしこうなり給へり」など人のいふいらへに、「何か。いと異樣にほろびて侍るなれば」などいふもしたり顔なり。又、人多く挑みたる中に、選られて壻に取られたるも、我はと思ひぬべし。こはき物のけ調じたる驗者。ゐふたぎの明疾うしたる。小弓射るに、片つ方の人、咳嗽をし紛はして騒ぐに、念じて、音高う射て中てたるこそ、したり顔なる氣色なれ。碁を打つに、さばかりと知らで、ふくつけきは、又、異所にかかぐりありくに、異方より目も無くして、多く拾ひ取りたるも嬉しからじや。誇かにうち笑ひたる、ただの

勝よりは誇かなり。ありありて、受領になりたる人の氣色こそ嬉しげなれ。僅にある従者のなめげにあなづるも、ねたしと思ひながら、いかがせむとて念じすぐしつるに、我にもまさる者どもの畏まり、ただ仰承らむと追従するさまは、ありし人とやは見えたる。女房うち使ひ、見えざりし調度、装束のわき出づる。受領したる人の中將になりたるこそ、もと君達の成り上りたるよりも、け高うしたり顔に、いみじう思ひためれ。位こそなほめでたきものにはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍従の君など聞ゆる折は、いとあなづり易きものを、中納言、大納言、大臣などになりぬるは、むげにせむ方なく、やむごとなく覺え給ふ事のこよなさよ。程程につけては、受領もさこそはあめれ。あまた國に行きて、大貳や四位などになりぬれば、上達部などもやむごとながり給ふめり。女こそなほわろけれ。内わたりに御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば重重しけれど、さりとて程過ぎ、何ばかりの事かはある。又多くやはある。受領の北の方にて下るこそ、よろしき人の幸には思ひてあめれ。凡人の上達部の

○待従―天子の御前に侍して、拾遺補闕を職とす。従五位下相當官。

○大貳―太宰の大貳。四位相當官。

○四位に―國司は大抵五位なれば也。

北の方になり、上達部の御女にて、后になり給ふこそめでたけれ。されど、なほ男は、わが身のなり出づるこそめでたく、うち仰ぎたる氣色よ。法師のなにがし供奉などいひてありくなどは、何とかは見ゆる。經尊く讀み、見め清げなるにつけても、女にあなづられてなり。かかりこそすれ、僧都、僧正になりぬれば、佛の現れ給へるにこそと怖ぢ惑ひて、畏まるさまは、何にかは似たる。

○凡人の上達部―門閥なくて上達部になれるをいふ。

○供奉―内供奉の略。内裏の道場に供奉する僧。

○かかりこそすれ―かくあれども。

百六十二段

風は　嵐。木枯。三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたる雨風、いとあはれなり。八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨の脚横様に、騒がしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣のかかりたるを、生絹の單衣に引き重ねて着たるもをかし。この生絹だに、いと暑かはしう捨てまほしかりしかば、いつの間にかうなりぬらむと思ふもをかし。曉、格子、妻戸など押し上げたるに、嵐のさと吹き渡りて、顔にしみたるこそ、いみじうをかしけれ。九月晦日、十月一日のほどの空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほ

○雨風―一本花風とあり。

ろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、椋の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。

百六十三段

野分の又の日こそ、いみじう哀に覺ゆれ。立蔀、透垣などの伏し並みたるに、前栽ども心苦しげなり。大きなる木ども倒れ、枝など吹き折られたるだに惜しきに、萩、女郎花などの上によろぼひ這ひ伏せる、いと思はずなり。格子の壺などに、さと際を殊更にしたらむやうに、細細と吹き入れたるこそ、荒かりつる風の仕業とも覺えね。いと濃き衣のうは曇りたるに、朽葉の織物、薄物などの小袿着て、まことしく清げなる人の、よるは風の騒に寢ざめつれば、久しう寢起きたるままに、鏡うち見て、身屋より少しゐざり出でたる、髪は風に吹き迷はされて、少しうちふくだみたるが、肩に懸かりたるほど、まことにめでたし。物あはれなる氣色見るほどに、十七八ばかりにやあらむ、小さうはあらねど、わざと大人などは見えぬが、生絹の單衣のいみじう綻びたる、花もかへり濡れなど

○壺―小間（コマ）。
○際―輪廓。
○うは曇―艶のうせたるをいふ。

したる、薄色の宿直物を着て、髪は尾花のやうなるそぎ末も、丈ばかりなれば、衣の裾にはづれて、袴のみ鮮やかにて、そばより見ゆる、わらはべ、若き人人の、根ごめに吹き折られたる前栽などを、取りあつめ起し立てなどするを、羨ましげに推し量りて、簾に添ひたるうしろもをかし。

百六十四段

心にくきもの　物隔てて聞くに、女房とは覺えぬ聲の、忍びやかに聞えたるに、答へ若やかにして、うちそよめきて參るけはひ。物參るほどにや、箸、かひなどの取りまぜて鳴りたる、ひさげの柄の倒れ伏すも、耳こそとどまれ。打ちたる衣のあざやかなるに、騒がしうはあらで、髪の振りやられたる。いみじうしつらひたる所の、大殿油は參らで、長炭櫃に、いと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいとつややかに見え、御簾の帽額の上げたる鉤の際やかなるも、けざやかに見ゆ。よく調じたる火桶の、灰清げにおこしたる火に、よく描きたる繪の見えたるをかし。箸のいと際やかに筋交ひたるもをかし。夜いたう更けて、人

○そぎ末―削ぎ末。
○女房とは云云―卽ち主婦らしき靡。
○かひ―匙。
○ひさげ―提子。酒など盛りて注ぐ器。

の皆寢ぬる後に、外の方にて、殿上人など物いふに、奥に碁石、笥に入るる音のあまた聞えたる、いと心憎し。簀子に火ともしたる。物隔てて聞くに、人の忍ぶるが、夜中などうち驚きて、いふ事は聞えず、男も忍びやかに笑ひたるこそ、何事ならむとをかしけれ。

百六十五段

島は　浮島。八十島。たはれ島。水島。松が浦島。雛の島。豐浦の島。たど島。

百六十六段

濱は　そとの濱。吹上の濱。長濱。打出の濱。もろよせの濱。千里の濱こそ廣う思ひやられる。

百六十七段

浦は　生の浦。鹽竈の浦。志賀の浦。名高の浦。こりずまの浦。和歌の浦。

百六十八段

寺は　壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住處なるがあはれなるなり。石山。粉川。志賀。

百六十九段

經は　法華經はさらなり。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼。

百七十段

文は　文集。文選。博士の申文。

百七十一段

佛は　如意輪は、人の心を思し煩ひて、面杖を突きておはする、世に知らずあはれに恥かし。千手、すべて六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文殊。

百七十二段

物語は　住吉、空穗の類。殿うつり。月まつ女。交野の少將。梅壺の少將。人

○文集―白氏文集。唐の白居易の詩文を集めたるもの。七十五卷。
○文選―梁の昭明太子の選になれる詩文集。六十卷。
○博士の申文―文章博士の申文。漢文にて書けり。
○如意輪―觀世音の一。
○六觀音―千手、聖、馬頭、十一面、准胝、如意輪。
○物語は―空穗の外は今傳はらず。

め。國ゆづり。うもれ木。道心すすむる。松が枝。狛野の物語は、舊きかはほりさし出でても去にしがをかしきなり。

百七十三段

野は　嵯峨野さらなり。いなび野。交野。狛野。粟津野。飛火野。しめぢ野。そうけい野こそ、すずろにをかしけれ。などさ附けたるにかあらむ。安部野。宮城野。春日野。紫野。

百七十四段

陀羅尼は　曉。

百七十五段

讀經は　夕暮。

百七十六段

あそびは　よる、人の顔見ぬほど。

百七十七段

現存の住吉は僞作なりと。
○かはほり—蝙蝠の扇。
○そうけい—奏慶か。
○陀羅尼—佛法の呪。眞言。
○あそび—音樂。

あそび業は　さまあしけれども、鞠もをかし。小弓。ゐんふたぎ。碁。

百七十八段

舞は　駿河舞。求子。太平樂は、樣あしけれど、いとをかし。太刀などうたてくあれど、いと面白し。唐土に敵に具して遊びけむなど聞くに。鳥の舞。拔頭は、頭の髮振り懸けたるまみなどは恐ろしけれど、樂もいとおもしろし。落蹲は、二人して膝ふみて舞ひたる。狛桙。

百七十九段

彈きものは　琵琶。箏の琴。

百八十段

しらべは　風香調。黃鐘調。蘇合の急。鶯の囀といふ調。想夫憐。

百八十一段

吹きものは　横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、やうやう近うなりゆくもをかし。近かりつるが遙になりて、いとほのかに聞ゆるも、いとをかし。車

○駿河舞、求子—東遊の一。
○太平樂—唐樂。
○樣あし—武裝して舞ふゆゑなり。
○敵に具して—漢の高祖と楚の項羽との鴻門の會に、項伯項莊劍を拔きて舞ひしたいふ。
○鳥の舞—迦陵頻の一名。印度樂。
○拔頭—林邑の樂か。
○落蹲—納蘇利の一名。高麗樂。
○狛桙—高麗樂。
○風香調、黃鐘調—風香は琵琶、黃鐘は笛。
○蘇合の急—盤涉調の樂にて、急はその後部の調。
○鶯の囀—春鶯囀。壹越調。
○想夫憐—平調の樂。

にても徒歩にても馬にても、すべて懐にさし入れてもたるも、何とも見えず。さばかりをかしき物はなし。まして聞き知りたる調子など、いみじうめでたし。曉などに、忘れて枕の許にありたるを見つけたるも、なほをかし。人の許より取りにおこせたるを、おし包みて遣るも、ただ文のやうに見えたり。笙の笛は、月のあかきに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せくもて扱ひにくくぞ見ゆる。吹く顔やいかにぞ。それは横笛も吹きなしありかし。篳篥はいとむつかしう、秋の蟲をいはば、轡蟲などに似て、うたてけ近く聞かまほしからず。ましてわろう吹きたるはいとにくきに、臨時の祭の日、いまだ御前には出ではてで、物のうしろにて、横笛をいみじう吹き立てたる、あな面白と聞くほどに、半ばかりより、うち添へて吹きのぼせたる程こそ、只いみじう、うるはしき髪もたらむ人も、皆立ちあがりぬべき心地ぞする。やうやう琴笛合はせて歩み出でたる、いみじうをかし。

○琴笛合はせて云云―清涼殿の庭上にあゆみ出づる也。

○御賀茂詣―關白のなり。
○臨時の祭―これは賀茂のなり。
○挿頭の花―舞人樂人などの冠帽につくる造花。
○青摺―青摺の衣の略。
○えうしたる―瑩したる。
○打目―打ちたる光澤。
○藤の花―挿頭の花なり。
○賀茂の社の云云―古今集「千早ぶる賀茂の社のゆふだすき一目も君をかけぬ日はなし」。
○姫まうち君―あづま童を見よ。
○御綱の助―鳳輦の御綱を奉行する大舍人助。
○中少將など―前驅のなり。

見るものは　行幸。祭のかへさ。御賀茂詣。臨時の祭、空曇りて寒げなるに、雪少しうち散りて、挿頭の花、青摺などに懸かりたる、えもいはずをかし。太刀の鞘の、際やかに見えたるに、半臂の緒のえうしたるやうに懸かりたる、地摺袴の中より、氷かと驚くばかりなる打目など、すべていとめでたし。今少し多く渡らせまほしきに、使は必ずよき人ならず、受領などなるは目もとまらずにくげなるが、藤の花に隠されたる程はをかしう、なほ過ぎぬる方を見送らるるに、陪從の品おくれたる、柳の下襲に、かざしの山吹、おもなく見ゆれども、扇いと高く打ち鳴らして、「賀茂の社の木綿だすき」とうたひたるは、いとをかし。行幸になずらふる物は、何かあらむ。御輿に奉りたるを見參らせたるは、明暮御前にさぶらひ仕うまつる事も覺えず、かうがうしういつくしう、常は何ともなきつかさ、姫まうち君さへぞ、やむごとなう珍しう覺ゆる。御綱の助、中少將など、いとをかし。

祭のかへさ、いみじうをかし。昨日はよろづの事うるはしうて、一條の大路の

廣う清らかなるに、日の影も暑く、車にさし入りたるもまばゆければ、扇にて隱し、居直りなどして、久しう待ちつるも、見苦しう汗などもあえしを、今日はいと疾く出でて、雲林院、知足院などの門に立てる車ども、葵かつらもうち萎えて見ゆ。日は出でたれど、空はなほうち曇りたるに、いかで聞かむと、目を覺まし起き居て待たるる時鳥の、數多さへあるにやと聞ゆるまで鳴き響かせば、いみじうめでたしと思ふほどに、鶯の老いたる聲にて、かれ似せむとおぼしく、うち添へたるこそ憎けれど、またをかし。いつしかと待つに、御社の方より、赤き衣など着たる者どもなど連れ立ちてくるを、「いかにぞ。事成りぬや」などいへば、「まだ無期」などいらへて、御輿、腰輿などもて歸る。これに奉りておはしますらむもめでたく、氣近く、いかでさる下衆などのさぶらふにかと恐ろし。遙げにいひつれど、程もなく歸らせ給ふ。扇より始めて、青朽葉どもの、いとをかしく見ゆるに、所の衆の、青色に白襲を、けしきばかり引き掛けたるは、卯の花垣根近う覺えて、時鳥も蔭に隱れぬべう覺ゆかし。昨日は車一つに數多乘りて、

○赤き衣云云―駕輿丁などなるべし。赤きは褪紅色。

○腰輿―手にて舁く輿。腰のほとりの高さに舁けば腰輿の名あり。

○かつら―槲。

二藍の直衣、あるは狩衣など亂れ着て、簾取りおろし、物ぐるほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にて、晝の裝束うるはしくて、今日は一人づつ、をさをさしく乘りたるしりに、殿上童乘せたるもをかし。渡り果てぬる後には、などかさしも惑ふらむ、我も我もと、危く恐ろしきまで、前に立たむと急ぐを、「かうな急ぎそ。のどやかに遣れ」と、扇をさし出でて制すれど、聞きも入れねば、わりなくて、少し廣き所に、强ひてとどめさせて立ちたるを、心もとなく憎しとぞ思ひたる。きほひかかる車どもを、見遣りてあるこそをかしけれ。少しよろしき程に遣りすぐして、道の山里めきあはれなるに、うつ木垣根といふ物の、いと荒荒しうおどろかしげに、さし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくもひらけ果てず、蕾勝に見ゆるを折らせて、車のこなたあなたなどに挿したるも、桂などの萎みたるがくちぼしきに、をかしう覺ゆ。遠きほどは、えも通るまじう見ゆる行く先を、近う行きもてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが、しりに引き續きてくるも、ただなるよりはをかしと

○垣下―庇の座なり。饗應の相伴人。

○をさをさし―長長し。大人し。

見るほどに、引き分かるる所にて、「峰にわかるる」といひたるをかし。

百八十三段

五月ばかり山里にありく、いみじくをかし。澤水もげに只いと青く見え渡るに、上はつれなく草生ひ茂りたるを、長長とただ樣に行けば、下はえならざりける水の、深うはあらねど、人の歩むにつけて、とばしりあげたる、いとをかし。左右にある垣の枝などのかかりて、車の屋形に入るを、急ぎて捉へて折らむと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるもくち惜し。蓬の車に押し拉がれたるが、輪の舞ひ立ちたるに、近うかかへたる香も、いとをかし。

百八十四段

いみじう暑き頃、夕涼といふ程の、物の樣などおぼめかしきに、男車の前追ふは、いふべき事にもあらず。ただの人も、しりの簾あげて、二人も一人も乘りて、走らせて行くこそ、いと涼しげなれ。まして琵琶ひき鳴らし、笛の音聞ゆるは、過ぎて去ぬるもくち惜しく、さやうなる程に、牛の鞦の香の、怪しう嗅ぎ知らぬ

○峯にわかるる―古今集「風ふけば峯にわかるる白雲のたえてつれなき人の心か」。

○上はつれなく云云―拾遺集「蘆根はふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を」。

○下はえならざりける―上はつれなくを見よ。

○舞ひ立ち―一まはりするをいふ。

さまなれど、うちかがれたるがをかしきこそ、物狂ほしけれ。いと暗う闇なるに、先にともしたる松のけぶりの香の、車の内にかかへたるも、いとをかし。

百八十五段

五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れて怪しきを、引き取りあげたるに、その折の香殘りてかかへたるも、いみじうをかし。

百八十六段

よく炷きしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などはうち忘れたるに、衣を引き被きたる中に、けぶりの殘りたるは、今のよりもめでたし。

百八十七段

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むままに、水晶などの割れたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

百八十八段

大きにてよきもの　法師。菓子。家。餌嚢。硯の墨。をのこの目、あまり細き

○けぶりの殘りたる―餘香の薫ずるをいふ。

は女めきたり。又、金椀のやうならむは恐ろし。火桶。酸醤、松の木。山吹の花びら。馬も牛も、よきは大きにこそあめれ。

百八十九段

短くてありぬべきもの　とみの物縫ふ絲。燈臺。下衆女の髪、うるはしく短くてありぬべし。人のむすめの聲。

百九十段

人の家につきづきしきもの　厨。侍の曹司。簾の新しき。懸盤。童女。はした者。衝立障子。三尺の几帳。裝束よくしたる餌嚢。傘。書板。棚厨子。提子。銚子。中の盤。圓座。ひぢをりたる廊。ちひろ。繪かきたる火桶。

百九十一段

物へ行く道に、清げなる男の、立文の細やかなる持ちて急ぎ行くこそ、いづちならむと覺ゆれ。又、清げなる童女などの、袖いとあざやかにはあらず、萎えばみたる、履子のつややかなるが、埴土多く付いたるをはきて、白き紙に包みたる物、

○むすめの聲―娘の物いひ。
○書板―塗板。
○銚子―酒を注ぐ器。
○中の盤―臺盤の類。
○ひぢをりたる―臂折りたる。角に曲りたるをいふ。
○ちひろ―地火爐。圍爐裏の一種。底に石を据ゑて塗りあぐ。
○埴土―粘土。

もしは箱の蓋に、草子どもなど入れてもて行くこそ、いみじう呼び寄せて見まほしけれ。門近なる所をわたるを呼び入るるに、愛敬なくいらへもせでいく者は、使ふらむ人こそ推し量らるれ。

百九十二段

行幸はめでたきものの、上達部、君達、車などのなきぞ、少しさうざうしき。

百九十三段

よろづの事よりも、わびしげなる車に、裝束わろくて物見る人、いともどかし。説經などはいとよし、罪失ふ方の事なれば。それだに尙あながちなる樣にて見苦しかるべきを、まして祭などは、見でありぬべし。下簾もなくて、白き單うち垂れなどしてあめりかし。只その日の料にとて、車も下簾もしたてて、いとくちぎしうはあらじと出でたるだに、まさる車など見つけては、何しになど覺ゆるものを、ましていかばかりなる心地にて、さて見るらむ。おりのぼりあり く君達の車の押し分けて、近う立つ時などこそ心ときめきはすれ。よき所に立

てむと急がせば、とく出でて待つほど、いと久しきに、居張り立ちあがりなど、暑く苦しく待ち困ずるほどに、齋院の垣下に參りたる殿上人、所の衆、辨、少納言など、七つ八つ引き續けて、院の方より走らせてくるこそ、事なりにけりと驚かれて嬉しけれ。殿上人の物いひおこせ、所所の御前どもに、水飯食はすとて、棧敷のもとに、馬引き寄するに、覺ある人の子どもなどは、雜色など下りて、馬の口取りなどしてをかし。さらぬ者の、見も入られぬなとぞいとほしげなる。御輿の渡らせ給へば、簾もあるかぎり取りおろし、過ぎさせ給ひぬるに、惑ひあぐるもをかし。その前に立つる車は、いみじう制するに、「などて立つまじきぞ」と、強ひて立つれば、いひ煩ひて、消息などするこそをかしけれ。所もなく立ち重なりたるに、よき所の御車、人給つづきて多くくるを、いづくに立たむと見るほどに、御前ども只下りに下りて、立てる車どもを、只のけにのけさせて、人給つづきて立てるこそ、いとめでたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所ある方にゆるがしもて行くなど、いとわびしげなり。きらきらしきなどを

○居張り—居ひろがるかいふ。

○水飯—水漬飯。

○御輿—齋院のなり。

○人給—副車。

ば、えさしも推し拉がずかし。いと清げなれど、又鄙びあやしく、下衆など絶えず呼び寄せ、乳兒出だしするなどするもあるぞかし。

百九十四段

「細殿に便なき人なむ、曉に笠ささせて出でける」といひ出でたるを、よく聞けば我がうへなりけり。地下などいひても目やすく、人に許されぬばかりの人にもあらざめるを、怪しの事やと思ふほどに、上より御文もて來て、「返事ただ今」と仰せられたり。何事にかと思ひて見れば、大笠のかたを描きて、人は見えず、只手のかぎり笠を捉へさせて、下に、

「三笠山やまの端あけしあしたより」

と書かせ給へり。なほはかなき事にても、めでたくのみ覺えさせ給ふに、恥かしく心づきなき事は、いかで御覽ぜられじと思ふに、さる虛言などの出でくるこそ、苦しけれどをかしうて、異紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

「雨ならぬ名のふりにけるかな。

○地下など云云—その便なきといはれたる人のうへをいへるなり。

○三笠山—その人は近衞司ならん。近衞の異名を三笠山といへり。

○ふり—降りに舊りをいひかく。

○濡衣―寃罪。

さてや、濡衣には侍らむ」と啓したれば、右近の内侍などに語らせ給ひて、笑はせ給ひけり。

○三條の宮―もとの生昌宅。
○菖蒲の輿―菖蒲艾など載せたる輿。
○若宮―敦康親王。
○青ざし―麥の未熟なるを煎り、皮を去りて臼にてひきて造れる菓子。
○ませごしに云云―萬葉及び六帖に「ませごしに麥はむ駒云云」とあるによりて、麥のことをほのめかせる也。ませは馬塞にて埒をいふ。

百九十五段

三條の宮におはします頃、五日の菖蒲の輿など持ちて參り、藥玉參らせなどす。若き人人、御匣殿など藥玉して、姫宮、若宮につけ奉らせ給ふ。いとをかしき藥玉外よりも參らせたるに、青ざしといふ物を、人のもてきたるを、青き薄樣を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これませごしにさぶらふ」とて參らせければ、

「みな人は花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける」

と、紙の端を引きやりて書かせ給へるも、いとめでたし。

○引き隱し―髮を
なり。
○かい越し―首より前へ振越すをいふ。

百九十六段

十月十餘日の月いとあかきに、ありきて物見むとて、女房十五六人ばかり、皆濃き衣をうへに着て、引き隱しつつありし中に、中納言の君の、紅の張りたるを着て、頸より髮をかい越し給へりしかば、「あたらしきぞ」とて、「よくも似たりしかな。靫負の佐」とぞ、若き人人はつけたりし。しりに立ちて笑ふも知らずかし。

○靫負の佐―淺耕
の袍を着る。

百九十七段

成信の中將こそ、人の聲は、いみじうよう聞き知り給ひしか。同じ所の人の聲などは、常に聞かぬ人は、更に得聞き分かず。ことに男は、人の聲をもおもてをも見分き聞き分かぬものを、いみじうみそかなるも、かしこう聞き分き給ひしこそ。

○大藏卿―藤原正
光。關白兼通の六
男。
○おほい殿の新中
將―成信のこと。

百九十八段

大藏卿ばかり耳敏き人なし。まことに蚊の睫の落つるほども、聞きつけ給ひつべくこそありしか。職の御曹司の西面に住みし頃、おほい殿の新中將と物いふに、そばにある人、この中將に、「扇の繪の事いへ」とささめけば、「今かの君立ち給ひなむにを」と、みそかにいひ入るるを、その人だに得聞きつけで、「何とか、何とか」と、耳をかたぶくるに、手を拍ちて、「にくし。さ宣はば、今日は立たじ」と宣

ふこそ、いかで聞き給ひつらむとあさましかりしか。

百九十九段

硯きたなげに塵ばみ、墨片つ方に、しどけなく磨りひらめて、頭大きになりたる筆に、笠さしなどしたるこそ、心もとなしと覺ゆれ。よろづの調度はさるものにて、女は、鏡、硯こそ、心のほど見ゆるなめれ。置口のはざめに塵ゐなど、打ち捨てたるさま、こよなしかし。男はまして、文机清げに押しのごひて、重ねならずば、二つ懸子の硯の、いとつきづきしう、蒔繪のさまも、わざとならねどをかしうて、墨、筆のさまなども、人の目留むばかりしたてたるこそをかしけれ。とあれどかかれどおなじ事とて、黒塗の蓋われたるに、片し折れたる硯するゑて、わづかに墨の磨られたる程、いささか黒みて、その外は瓦の目に隨ひて入りゐたる塵の、この世には拂ひがたげなるに、水うち流して、青磁のかめの口落ちて、首のかぎり穴のほど見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せて、手習をも文をも書くに、「その筆な使ひ給ひそ」といはれたらむこそ、いとわびしかるべけれ。うち置かむも人わろし、なほ使ふもあやにくなり。さ覺ゆることも知りたれば、人のさするもいはで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物書かまほしうするは、いとよく使ひ固めたる筆を、あやしのやうに、水がちにさし濡らして、「こはものやあり」と、假字に細櫃の蓋などに書き散らして、横ざまに投げ置きたれば、水に頭はさし入れて伏せるも、憎き事ぞかし。されど、さいはむやは。人の前に居たるに「あなくら。おう寄り給へ」といひたるこそ、又わびしけれ。さし覗きたるを見つけては、驚きいはれたるも。思ふ人の事にはあらずかし。

二百段

珍しといふべき事にはあらねど、文こそなほめでたきものなれ。遙なる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、いかならむと思ふに、文を見れば、只今さし向ひたるやうに覺ゆる、いみじき事なりかし。わが思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行き着かざるらめど、心ゆく心地こそすれ。文といふことなから

○置口―金銀などいかけたるふち。
○はざめ―はざま。箱と置口とのさかひ。
○瓦の目―瓦硯なるべし。
○かめ―龜か。

ましかば、いかにいぶせく暮れふたがる心地せまし。よろづの事思ひ思ひて、その人の許へとて、こまごまと書きて置きつれば、おぼつかなさは慰む心地するに、まして返事見つれば、命を延ぶべかめる、げにことわりにや。

二百一段

驛は　梨原。ひぐれの驛。望月の驛。野口の驛。やまの驛。あはれなる事を聞き置きたりしに、又あはれなる事のありしかば、なほ取り集めてあはれなり。

二百二段

岡は　船岡。片岡。鞆岡は、笹の生ひたるがをかしきなり。かたらひの岡。人見の岡。

二百三段

社は　布留の社。生田の社。龍田の社。はなふちの社。美久里の社。杉の御社、しるしあらむとをかし。事のままの明神、いと頼もし。「さのみ聞きけむ」とやいはれ給はむと思ふぞ、いとをかしき。蟻通の明神、貫之が馬の煩ひけるに、

○笹のおひたる―神樂歌に「この笹ぞ舍人等がこしにさがれる鞆岡の笹」。

○杉の御社―三輪の社のこと。古今集に「わが庵は三輪の山本こひしくばとぶらひきませ杉たてる門」。

○さのみ聞きけむ―願意を聞届けむと也。古今集「れぎ事たさのみ聞きけむ社こそつひに歎きの森となりなめ」。

○蟻通―和泉泉南郡。

○貫之が云云―貫之、闇夜に或社前を乘打したるに、馬の俄に煩ひたるが、蟻通の神の咎め給ふと聞きて、「かき曇りあやめもしらぬ闇の夜にありとほしたぐ思ふべしやはとよみて奉りければ、馬の心ちなほりけりとぞ。

この明神のやませ給ふとて、歌詠みて奉りけむに、やめ給ひけむ、いとをかし。この蟻通とつけたる心は、まことにやあらむ、「昔おはしましける帝の、只若き人をのみ思し召して、四十になりぬるをば失はせ給ひければ、ひとの國の遠きにいき隠れなどして、更に都のうちに、さる者なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七十ちかき親二人をもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていと恐ろしとおぢ騒ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には、更に住ませじ、一日に一度見ではえあるまじとて、みそかによるよる、家の内の土を掘りて、その内に屋を建てて、それに籠めすゑていきつつ見る。おほやけにも人にも、失せ隠れたるよしを知らせてあり。などてか、家に入り居たらむ人をば、知らでもおはせかし。うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけむ、中將など子にてもたりけむは。いと心賢く、よろづの事知りたりければ、この中將若けれど、才あり、いたり賢くして、時の人に思すなりけり。唐土の帝、この國の帝をいかではかりて、この國うち取らむ

とて、常に試み、あらがひ事をして贈り給ひけるに、つやつやとまろに、美しげに削りたる木の二尺ばかりあるを、『これが本末いづらぞ』と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやうなければ、帝思し召し煩ひたるに、いとほしくて、親の許にゆきて、『かうかうの事なむある』といへば、『只早からむ川に、たちながら横ざまに投げ入れ見むに、かへりて流れむ方を、末と記して遣はせ』と教ふ。参りて、我が知り顔にして、『試み侍らむ』とて、人人具して投げ入れたるに、先にして行く方に、しるしをつけて遣はしたれば、まことにさなりけり。又、二尺ばかりなる蛇の同じやうなるを、『これはいづれかをとこ、をんな』とて奉れり。又更に人え知らず。例の中將行きて問へば、『二つを並べて、尾の方に、細きすばえをさし寄せむに、尾はたらかさむを雌と知れ』といひければ、やがてそれを、内裏のうちにてさしければ、まことに一つは動かさず、一つは動かしけるに、又、しるしつけて遣はしけり。ほど久しうて、七曲に蟠まりたる玉の中とほりて、左右に口ありたるが、小さきを奉りて、『これに緒通して給はらむ。この國に皆し

○たち―たての音便。

○すばえ―蘖。ひこばえ。

侍ることなり』とて奉りたるに、いみじからむ物の上手不用ならむ。そこらの上達部より始めて、ありとある人『知らず』といふに、又いきて、『かくなむ』といへば、『大きなる蟻を二つ捕へて、腰に細き絲をつけ、又それに、今少し太きをつけて、あなたの口に、みちを塗りて見よ』といひければ、さ申して、蟻を入れたりけるに、みちの香を嗅ぎて、まことにいと疾う穴の口に出でにけり。さて、その絲のつらぬかれたるを遣はしたりける後になむ、『なほ日本は賢かりけり』とて、後後はさる事もせざりけり。この中將をいみじき人に思し召して、『何事をし、いかなる位をか賜ふべき』と仰せられければ、『更につかさ位をも賜はらじ。只老いたる父母の隠れ失せて侍るを尋ねて、都に住ますることを許させ給へ』と申しければ、『いみじう安き事』とて許されにければ、よろづの人の親、これを聞きて、よろこぶ事いみじかりけり。中將は、大臣までになさせ給ひてなむありける。さてその人の神になりたるにやあらむ。この明神の許へ詣でたりける人に、よる現れて宣ひける。

○みち―蜜の字音。

○ありとほしとも―蟻通の神と祀られたりとも。

七曲にまがれる玉の緒をぬきてありとほしをも知らずやあるらむ。

と宣ひける」と、人の語りし。

二百四段

降るものは　雪。霰。霙は憎けれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮葺、いとめでたし。少し消え方になりたるほど、又、いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋。霜も板屋、庭。

二百五段

日は　入日。入り果てぬる山際に、光のなほとまりて赤う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり。

二百六段

月は　在明。東の山の端に、細うて出づるほどあはれなり。

二百七段

○すばる―昴星。
○ゆふづつ―宵の明星。
○よばひ星―流星。

星は　すばる。牽牛。明星。ゆふづつ。よばひ星をだになからましかば、まして。

二百八段

雲は　白き。紫。黒き雲あはれなり。風吹く折の雨雲。明け離るるほどの黒き雲の、やうやう白うなりゆくも、いとをかし。「朝に去る色」とかや、文にも作りためる。月のいとあかきおもてに薄き雲、いとあはれなり。

○朝に去る色―詩文の句なるべし。事は楚の宋玉の高唐賦に「旦爲二朝雲一、暮爲二行雨一、云云」といへる巫山の神女の説話に本づく。

二百九段

騒がしきもの　はしり火。板屋のうへにて、烏の齋のさばくふ。十八日清水に籠り合ひたる。暗うなりてまだ火もともさぬ程に、外外より人の來集まりたる。まして遠き所、ひとの國などより、家の主人ののぼりたる、いと騒がし。近きほどに火出で來ぬといふ。されど燃えはつかざりける。物見はてて、車のかへり騒ぐほど。

○齋のさば―さばは生飯、衆生飯、三飯、三把などかく。食前にその飯を少し取りのけて、鬼神などに手向くるといふ。
○十八日―觀音の緣日。

二百十段

○唐繪の云云―唐繪を蒔繪にしたる石の帶の裏。

○宮の女の祭文―宮之咩の祭文とてあり。

○雷鳴の陣―宮中なる襲芳舍。雷鳴の時、近衞の武官の伺候する處なればいふ。

○物の具乞ひ―材料を請求し。

○切目多かる物―御幣(シデ)の切目多きをいふ。

○しで掛け―垂らしかけ。

○女ゑ―祈する女みづからいふ語。

ないがしろなるもの　女官どもの髪あげたる姿。唐繪の皮の帶のうしろ。聖のふるまひ。

二百十一段

詞なめげなるもの　宮の女の祭文よむ人。船漕ぐ者ども。雷鳴の陣の舍人相撲。

二百十二段

さかしきもの　今やうの三年子。乳兒の祈り、祓などする女ども、物の具乞ひ出でて、祈の物ども作るに、紙あまた押し重ねて、いと鈍き刀して切るさま、一重だに斷つべくも見えぬに、さる物の具となりにければ、おのが口をさへ引きゆがめて押し切り、切目多かる物どもしで掛け、竹打ち切りなどして、いとかうがうしうしたてて、うち振ひ祈る事ども、いとさかし。かつは「何の宮、その殿の若君、いみじうおはせしを、搔いのごひたるやうに止め奉りしかば、祿多く賜はりしこと、その人々召したりけれど、しるしもなかりければ、今に女をなむ召す。御德を見ること」など語るもをかし。下衆の家の女あるじ。痴れたる者添へるもをかし。まことにさかしき人をも、教へなどすべし。

二百十三段

上達部は　春宮大夫。左右の大將。權大納言。權中納言。宰相中將。三位中將。東宮權大夫。侍從宰相。

二百十四段

君達は　頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人兵衞佐。

二百十五段

法師は　律師。內供。

二百十六段

女は　內侍のすけ。內侍。

二百十七段

○律師―戒律の師範。僧綱の一。

○內供―內供奉の略。供奉とも。

○罪深けれど―齋院は神に仕ふるが爲に、佛を疎外して、經佛の名をも忌む故なり。
○この頃は云云―當時の齋院選子内親王は圓融朝以來の齋院にて勢あればいふ。
○ばくぎぬ―帛衣。また白衣。
○御帳のうち―主人の居所なり。
○雜色―藏人所の雜色。
○外より―藏人所以外より。
○かた付きたる―袍に石帶のあたる痕のつきたるをいふ。今は宿直奏なれば、石帶は用ひざるなり。

宮仕所は　うち。后宮。その御腹の姫宮、「一品の宮」など申したる。齋院は罪深けれどをかし。ましてこの頃はめでたし。春宮の御母の女御。

二百十八段

身を換へたらむ人などは、かくやあらむと見ゆるもの　ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる。唐衣も着ず、裳をだに用意なく、はくぎぬにて御前に添ひ臥して、御帳のうちを居所にして、女房どもを呼び使ひ、局に物いひやり、文取り次がせなどしてある樣よ。いひ盡すべくだにあらず。雜色の藏人になりたるめでたし。去年の霜月の臨時の祭に、御琴もたりし人とも見えず。君達に連れてありくは、いづくなりし人ぞとこそ覺ゆれ。外よりなりたるなどは、同じ事なれど、さしも覺えず。

二百十九段

雪高う降りて、今もなほ降るに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、袍の色いと清らにて、革の帶のかた付きたるを、宿直奏に引きはこへて、紫の指貫も、雪にはえて、濃さ勝りたるを着て、袖の紅ならずは、おどろおどろしき山吹を出だして、傘をさしたるに、風のいたく吹きて、横さまに雪を吹きかくれば、少しかたぶきて歩みくる深履、半靴などの際まで、雪のいと白くかかりたるこそをかしけれ。

○御湯殿の馬道―清涼殿の北庇に、切馬道あり。御湯殿のわきなり。馬道は殿中を通したる板敷の道。
○纓―冠の後に垂れたる帛。
○引き越し―纓を前へ引き越し。
○凶會日―曆書に「是日尤凶、百事勿レ用」とあり。但當時あまり忌まざりしなるべし。

二百二十段

細殿の遣戸、いととう押し開けたれば、御湯殿の馬道より下りてくる殿上人の萎えたる直衣、指貫の、いたく綻びたれば、いろいろの衣どものこぼれ出でたるを押し入れなどして、北の陣の方ざまに歩み行くに、あきたる遣戸の前を過ぐとて、纓を引き越して、顏にふたぎて過ぎぬるもをかし。

二百二十一段

ただ過ぎに過ぐるもの　帆あげたる船。人の齡。春夏秋冬。

二百二十二段

ことに人に知られぬもの　人の女親の老いたる。凶會日。

二百二十三段

五六月の夕方、青き草を、細ううるはしく切りて、赤衣着たるをのこの、小さき笠を着て、左右にいと多く持ちてゆくこそ、すずろにをかしけれ。

二百二十四段

賀茂へ詣づる道に、女どもの、新しき折敷のやうなる物を笠にきて、いと多く立てりて、歌をうたひ、起き伏すやうに見えて、只何すともなくうしろ様に行くは、いかなるにかあらむ。をかしと見るほどに、時鳥をいとなめくうたふ聲ぞ心憂き。「時鳥よ。おれよ。かやつよ。おれ鳴きてぞ、われは田にたつ」とうたふを聞くも、いかなりし人か、「いたくな鳴きそ」とはいひけむ。仲忠が童生いひおとす人と、「鶯に時鳥は劣れる」といふ人こそ、いとつらうにくけれ。

二百二十五段

八月晦日がたに、太秦に詣づとて見れば、穂に出でたる田に、人多くて騒ぐ。稲刈るなりけり。「早苗とりしかいつの間に」とはまこと。げにさいつ頃、賀茂に

○なめく—無禮に。
○いたくな鳴きそ—萬葉集に藤原夫人「時鳥いたくな鳴きそながぎをさつきの玉にあへぬくまでに」。
○太秦—山城葛野郡太秦にある廣隆寺。
○早苗とりしか云云—古今集「きのふこそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風ぞふく」。

詣づとて見しが、あはれにもなりにけるかな。これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稲の、もとは青きをもたりて、刀か何にかあらむ、もとを切るさまの安げに、めでたき事に、いとせまほしく見ゆるや。いかでさすらむ、穂をうへにして並みをる、いとをかしう見ゆ。庵のさまことなり。

二百二十六段

いみじくきたなきもの　蛞蝓。えせ板敷の箒。殿上の合子。

○合子—蓋付の椀。

二百二十七段

せめて恐ろしきもの　よる鳴る神。近き隣に盗人の入りたる。わが住む所に入りたるは、只物も覺えねば、何とも知らず。近き火、又恐ろし。

二百二十八段

頼もしきもの　心地惡しき頃、僧數多して修法したる。思ふ人の心ち惡しき頃、まことに頼もしき人のいひ慰めたのめたる。物恐ろしき折の、親どもの傍。

二百二十九段

いみじうしたてて壻取りたるに、いと程なく住まぬ壻の、さるべき所などにて鼻に逢ひたる、いとほしとや思ふらむ。或人の、いみじう時にあひたる人の壻になりて、一月もはかばかしうも來でやみにしかば、すべていみじういひ騒ぎ、乳母などやうの者は、まがまがしき事どもいふもあるに、その返る年の正月に、藏人になりぬ。「『あさましうかかる中らひに、いかで』とこそ人は思ひためれ」などいひ扱ふは聞くらむかし。六月に、人の八講し給ひし所に、人人集まりて聞くに、この藏人になれる壻の、れうのうへの袴、蘇枋がさね、黒半臂などいみじうあざやかにて、忘れにし人の車のとみの尾に、半臂の緒引き懸けつばかりにて居たりしを、いかに見るらむと、車の人人も、知りたる限はいとほしがりしを、こと人どもも、「つれなく居たりしものかな」など、後にもいひき。なほ男は物のいとほしさ、人の思はむことは知らぬなめり。

○かかる中らひに―かく面白からぬ身壻の間柄なるに。
○れう―綾の字音。
○蘇枋がさね―蘇枋染の下襲。
○とみの尾―鴛尾。轅の車體の後部に出でたる部分。

二百三十段

世の中になほいと心憂きものは、人に憎まれむことこそあるべけれ。誰てふ物狂か、われ人にさ思はれむとは思はむ。されどしぜんに、宮仕所にも、親はらからの中にも、思はるる思はれぬがあるぞ、いとわびしきや。よき人の御事は更なり、下衆などの程も、親などのかなしうする子は、目立ち見立てられて、いたはしうこそ覺ゆれ。見るかひあるはことわり、いかが思はざらむと覺ゆ。こなる事なきは、又、これをかなしと思ふらむは、親なればぞかしとあはれなり。親にも君にも、すべてうち語らふ人にも、人に思はれむばかりめでたき事はあらじ。

○しぜん―自然の字音。
○おほやけ所―禁中、朝廷。

二百三十一段

男こそなほいとあり難く、怪しき心地したるものはあれ。いと清げなる人を棄てて、にくげなる人をもたるも怪しかし。おほやけ所に入り立ちする男、家の子などは、あるが中によからむをこそは、選りて思ひ給はめ。及ぶまじからむ際をだに、めでたしと思はむを、死ぬばかりも思ひかかれかし。人の女まだ見ぬ人などをも、よしと聞くをこそは、いかでとも思ふなれ。それに女の目にもわ

ろしと思ふを思ふは、いかなる事にかあらむ。かたちいとよく、心もをかしき人の、手もよう書き、歌をもあはれに詠みておこせなどするを、返事はさかしらに打ちするものから、寄り付かず、らうたげにうち泣きて居たるを、見棄てていきなどするは、あさましう公腹立ちて、眷属の心地も心憂く見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心苦しきを思ひ知らぬよ。

○公腹立ちて―公憤。

二百三十二段

よろづの事よりも情あるこそ、男はさらなり、女もめでたく覺ゆれ。なげの詞なれど、けにくきはくち惜しき事なり。せちに心に深く入らねど、いとほしき事を、「いとほし」とも、哀なるをば、「げにいかに思ふらむ」などいひけるを傳へて聞きたるは、さし向ひていふよりも嬉し。いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがなど、常にこそ覺ゆれ。必ず思ふべき人訪ふべき人は、さるべき事なれば、取り分かれしもせず。さもあるまじき人の、さしいらへをも心安くしたるは、嬉しき業なり。いと易き事なれど、更にえあらぬ事ぞかし。大かた心よき人の、まことにかどあるは、男も女もあり難きことなめり。又、さる人も多かるべし。

○なげの詞―すて詞。

二百三十三段

人のうへいふを腹立つ人こそ、いとわりなけれ。いかでかはあらむ。わが身をさし置きて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある。されど、けしからぬやうにもあり。又、おのづから聞きつけて恨みもぞする。あいなし。又、思ひ放つまじきあたりは、いとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや。さだになくは、うち出で笑ひもしつべし。

○念じて―我慢して。

二百三十四段

人の顔に取り分きてよしと見ゆる所は、度毎に見れども、あなをかし珍しとこそ覺ゆれ。繪などは數多たび見れば、目も立たずかし。近う立てる屏風の繪などは、いとめでたけれども見もやらず。人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるるよ。醜きも、さこそはあらめ、と

○かど―才智。

思ふこそわびしけれ。

二百三十五段

嬉しきもの　まだ見ぬ物語の多かる。又一つを見て、いみじうゆかしう覺ゆる物語の、二つ見つけたる、心劣りするやうもありかし。人のやり捨てたる文を見るに、おなじ續き數多見つけたる。いかならむと思ふ夢を見て、恐ろしと胸潰るるに、事にもあらず合はせなどしたる、いと嬉し。よき人の御前に、人人數多さぶらふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ、語らせ給ふを、我に御覽じ合はせて宣はせ、いひ聞かせ給へる、いと嬉し。遠き所は更なり、おなじ都の内ながら、身にやむごとなく思ふ人の惱むを聞きて、いかにいかにとおぼつかなく歎くに、おこたりたる消息得たるも嬉し。思ふ人の、人にも譽められ、やむごとなき人などの、くち惜しからぬ者に思し宣ふ。物の折、もしは人といひかはしたる歌の聞えて譽められ、打聞などに書き入れらるる。みづからの上には、まだ知らぬ事なれど、なほ思ひやらるるよ。いたう

○合はせ―夢合すること。

○おこたり―平癒。

うち解けたらぬ人のいひたる舊き事の知らぬを、聞き出でたるも嬉し。後に物の中などにて見付けたるはをかしう、只これにこそありけれと、かのいひたりし人ぞをかしき。みちのくに紙、白き色紙、ただのも、白う清きは、得たるも嬉し。恥かしき人の歌の本末問ひたるに、ふと覺えたる、我ながらうれし。常には覺ゆる事も、また人の問ふには、清く忘れてやみぬる折ぞ多かる。とみに物求むるに見出でたる。只今見るべき文などを求め失ひて、よろづの物を返す返す見たるに、搜し出でたるいと嬉し。物合、何くれといどむ事に勝ちたる、いかでか嬉しからざらむ。又、いみじう我はと思ひて、したり顏なる人はかり得たる。女どちよりも、男は勝りて嬉し。これがたふは必ずせむずらむと、常に心遣ひせらるるもをかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬさまにて、たゆめすぐすもをかし。憎き者のあしき目見るも、罪は得らむと思ひながら嬉し。刺櫛すらせたるにをかしげなるも、また嬉し。思ふ人のうへは、わが身よりも勝りて嬉し。御前に人人所もなく居たるに、今上りたれば、すこし遠き柱の許

○物合―さまざまの物を左右に番へて勝負をきそふ遊戯。繪合、貝合、扇合、草花合等おほし。歌合もその一。

○たふ―答の字音。返報。

などに居たるを御覽じつけて、「宮「こちこ」と仰せられたれば、道あけて、近く召し入れたるこそ嬉しけれ。

○高麗縁―白地の綾に雲形花形などの紋を黒く織出したる縁。

○姥捨山の月は―古今集「わが心慰めかねつ更科や姥捨山にてる月を見て」。

○息災―災禍を息むる。無事。

二百三十六段

御前に人人あまた、物仰せらるるついでなどにも、「清世の中の腹立たしうむつかしう、片時あるべき心ちもせで、いづちもいづちもいき失せなばやと思ふに、ただの紙のいと白う清らかなる、よき筆、白き色紙、みちのく紙など得つれば、かくても暫しありぬべかりけりとなむ覺え侍る。又、高麗縁の疊の莚青う細かに、縁の紋あざやかに、黒う白う見えたる、引き廣げて見れば、何かなほ更に、この世はえ思ひ放つまじと、命さへ惜しくなむなる」と申せば、「宮いみじくはかなき事にも慰むるかな。姥捨山の月は、いかなる人の見るにか」と笑はせ給ふ。侍ふ人も、「いみじく易き息災の祈かな」といふ。さて後に程經て、すずろなる事を思ひて、里にある頃、めでたき紙を、二十包に裹みて賜はせたり。仰言には、「宮疾く參れ」など宣はせて、「宮これは聞しめし置きたる事ありしかばなむ。わろかめれば、壽命經も得書くまじげにこそ」と仰せられたる、いとをかし。むげに思ひ忘れたりつる事を、思し置かせ給へりけるは、尙平人にてだにをかし。まして疎ならぬ事にぞあるや。心も亂れて、啓すべき方もなければ、ただ、

○壽命經―壽命陀羅尼、又一切如來金剛壽命陀羅尼經とも。一卷。上に命さへなしく、又息災の祈などある。承けて、この經ないへり。

○かみ―神に紙をかく。

「清かけまくもかしこきかみのしるしには鶴の齡になりぬべきかな。

あまりにやと啓せさせ給へ」とて、參らせつ。臺盤所の雜仕ぞ、御使にはきたる。青き單衣など取らせて。まことにこの紙を、草子に作りてもて騷ぐに、むつかしき事も紛るる心地して、をかしう心のうちも覺ゆ。

二日ばかりありて、赤衣着たる男の、疊をもて來て、「これ」といふ。「下女あれは誰ぞ。あらはなり」など、物はしたなういへば、さし置きて去ぬ。「清いづこよりぞ」と問はすれば、「下女まかりにけり」とて取り入れたれば、こと更に御座といふ疊のさまにて、高麗などいと清らなり。心の中にはさにやあらむと思へど、なほおぼつかなきに、人ども出だし求めさすれど失せにけり。怪しがりいへど、使のなければいふかひなし。所たがへなどならば、おのづからも又いひに來なむ。宮の

○赤衣―赤き衣を見よ。

ほとりに案内しに參らせまほしけれど、なほ誰れすずろにさる業はせむ、仰言なめりと、いみじうをかし。二日ばかり音もせねば、疑もなくて、左京の君の許に、「清かかる事なむある。さる事や氣色見給ひし。忍びて有樣宣へ。さる事見えずは、かく申したりとも、な洩らし給ひそ」といひ遣りたるに、「左京いみじう隱させ給ひし事なり。ゆめゆめ、まろが聞えたるとなく、後にも」とあれば、されば よと思ひしもしるくをかしくて、文書きて、又、みそかに御前の勾欄に置かせしものは、惑ひけるほどに、やがて搔きおとして、御階のもとに落ちにけり。

○關白殿—道隆。
○二月二十日—正暦五年。
○法興院—二條の北京極の東にあり、もと關白兼家の邸。
○二條の宮—中宮御所。
○白うをかしげに—その新築なるをいふ。

二百三十七段

關白殿、二月二十日の程に、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切經供養せさせ給ふ。女院、宮の御前もおはしますべければ、二月朔日のほどに、二條の宮へ入らせ給ふ。夜更けてねぶたくなりにしかば、何事も見入れず。つとめて、日のうららかにさし出でたるほどに起きたれば、いと白うをかしげに造りたるに、御簾より始めて、昨日懸けたるなめり。御しつらひ、獅子、狛犬など、いつの程にか入り居けむとぞをかしき。櫻の一丈ばかりにて、いみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、いと疾う咲きたるかな、梅こそ只今盛なめれと見ゆるは、造りたるなめり。すべて花の匂など、咲きたるに劣らず。いかにうるさかりけむ。雨降らば萎みなむかしと見るぞくちぎしき。小家などいふ物の多かりける所を、今造らせ給へれば、木立などの見所あるは、いまだなし。ただ宮のさまぞ、け近くをかしげなる。

殿渡らせ給へり。青鈍の固紋の御指貫、櫻の直衣に、紅の御衣三つばかり、ただ直衣に重ねてぞ奉りたる。御前より始めて、紅梅の濃きうすき、織物、固紋、りうもんなど、ある限り着たれば、只光り滿ちて、唐衣は萌黃、柳、紅梅などもあり。御前に居させ給ひて、物など聞えさせ給ふ。御いらへのあらまほしさを、里人にわづかに覗かせばやと見奉る。女房どもを御覽じ渡して、「宮に何事を思し召すらむ。ここらめでたき人人をなべ居るて御覽ずるこそ、いと羨ましけれ。一人わろき人なしや。これ家家の女ぞかし。あはれなり。よく顧みてこ

○うるさかり—功者。
○りうもん—綾文。

そさぶらはせ給はめ。さてもこの宮の御心をば、いかに知り奉りて集まり給へるぞ。いかに卑しく物咎みせさせ給ふ宮とて、我は生まれさせ給ひしより、いみじう仕うまつれど、まだおろしの御衣一つ賜はらず、何かしりう言には聞えむ」など宣ふがをかしきに、皆人人笑ひぬ。「まことぞ。をこなりとて、かく笑ひいますが恥かし」など宣はするほどに、内より御使にて、式部の丞某参れり。御文は、大納言殿取り給ひて、殿に奉らせ給へば、ひき解きて、「いとゆかしき御文かな。許され侍らば、あけて見侍らむ」と宣はすれど、あやしとおぼいためり。「辱なくもあり」とて奉らせ給へば、取らせ給ひても、廣げさせ給ふやうにもあらずもてなさせ給ふ、御用意などぞありがたき。隅のまより、女房褥さし出でて、三四人御几帳のもとに居たり。「あなたにまかりて、祿のこと物し侍らむ」とて、立たせ給ひぬる後に、御文御覽ず。御返しは、紅梅の紙に書かせ給ふが、御衣のおなじ色に匂ひたる、なほかうしもおし量り参らする人はなくやあらむとぞくち惜しき。今日はこと更にとて、殿の御方より、祿は出ださせ給ふ。女の裝束に、紅梅の細長添へたり。盃などのあれば醉はさまほしけれど、「今日はいみじき事の行事に侍り。あが君許させ給へ」と、大納言殿に申して立ちぬ。君達などいみじう化粧じ給ひて、紅梅の御衣ども劣らじと着給へるに、三の御前は御匣殿なり。中の姫君よりも大きに見え給うて、上など聞えむにぞよかめる。うへも渡らせ給へり。御几帳ひき寄せて、新しく参りたる人人には見え給はねば、いぶせき心地す。さしつどひて、かの日の装束、扇などの事をいひ合はするもあり。又挑みかはして、「まろは何か。只あらむに任せてを」などいひて、「例の君」など憎まる。夜さりまかづる人も多かり。かかる事にまかづれば、えとどめさせ給はず。うへ日日に渡り、夜もおはします。君達などおはすれば、御前人少なからで、いとよし。内の御使日日に参る。

御前の櫻色はまさらで、日などに當りて萎み、わろうなるだにわびしきに、雨のよる降りたるつとめて、いみじうむとくなり。いと疾く起きて、「泣きて別れむ顔に心劣りこそすれ」といふを聞かせ給ひて、「げに雨のけはひしつるぞかし。

○しりう言―後言。陰言。

○大納言殿―伊周。

○三の御前―關白の第三女。敦道親王の北の方。但御匣殿は第四女。

○中の姫君―第二女ないふ。淑景舍女御原子。

○うへも―關白の北の方。

○泣きて別れむ―拾遺集「櫻花露にぬれたる顔みれば泣きて別れし人ぞ悲しき」。

いかならむ」とて驚かせ給ふに、殿の御方より、侍の者ども、下衆など來て、あまた花のもとに只寄りに寄りて、引き倒し取りて、『みそかにいきて、まだ暗からむに取れ』とこそ仰せられつれ。明け過ぎにけり。不便なるわざかな。疾く疾く」と倒し取るに、いとをかしくて、「いはばいはなむ」と、兼澄が事を思ひたるにやとも、よき人ならばいはまほしけれど、「かの花盗む人は誰ぞ。惡しかめり」といへば、笑ひて、いとど逃げて引きもていぬ。なほ殿の御心はをかしうおはすかし。枝どもに濡れまつはれつきて、いかに見るかひなからましと見て入りぬ。掃部寮參りて御格子まゐり、主殿の女官御清め參り果てて、起きさせ給へるに、花のなければ、「あなあさまし。かの花はいづちいにける」と仰せらる。「曉『盗人あり』といふなりつるは、なほ枝などを少し折るにやとこそ聞きつれ。誰がしつるぞ。見つや」と仰せらる。「さも侍らず。いまだ暗くて、よくも見侍らざりつるを、白みたる物の侍れば、花を折るにやと、うしろめたさに申し侍りつる」と申す。「さりとも、かくはいかでか取らむ。殿の隱させ給へるなめり」とて

○いはばいはなむ—後撰集に素性「山守はいはばいはなむ高砂の尾上の櫻折りてかざさむ」。兼澄のにも、これに似たるがありしならん。
○兼澄—源氏。

笑はせ給へば、「いでよも侍らじ。春風のして侍るならむ」と啓するを、「かくいはむとて隱すなりけり。盗みにはあらで、降りにこそ降るなりつれ」と仰せらるるも、珍しき事ならねど、いみじうぞめでたき。殿おはしませば、寢くたれの朝顔も、時ならずや御覽せむと引き入らる。おはしますままに、「かの花の失せにけるは。いかにかくは盗ませしぞ。いぎたなかりける女房達かな。知らざりけるよ」と驚かせ給へば、「されど、我より先にとこそ思ひて侍りつれ」と忍びやかにいふを、いと疾く聞き付けさせ給ひて、「さ思ひつる事ぞ。世に異人出でて見付けじ。宰相とそことの程ならむと推し量りつ」とて、いみじう笑はせ給へふ。「さりけるものを、少納言は春風に負せける」と、宮の御前の打ち笑ませ給へる、めでたし。「虚言を仰せ侍るなり。今は山田も作るらむ」とうち誦んぜさせ給へるも、いとなまめきてをかし。「さてもねたく見付けられにけるかな。さばかり誠めつるものを、人の所に、かかる痴者のあるこそ」と宣はす。「春風は空に、いとをかしうもいふかな」と、又うち誦んぜさせ給ふ。「ただ言には、うるさく思

○我より先にと—我我より先に御承知の筈と。
○今は山田も—貫之集「山田さへ今はつくるなちる花のかごとは風におほせざらなむ」。
○ただ言—平言。

○小若君―松君のこと。

○近うなして―供養の日近くなして。
○花の心開けたりや―白氏文集「九月西風興、月冷霜華凝、思レ君秋夜長、一夜魂九升、二月東風來、草柝花心開、思レ君春日遲、一夜腸九廻、云云」。花心開の語による。
○秋はまだしく云云―上なる思君秋夜長、一夜魂九升の句による。
○出でさせ給ひし夜―二條の宮へ行啓ありし夜。
○得選―御厨子所の女官。采女より選仕す。

ひよりて侍りつかし。今朝の様いかに侍らまし」とて笑はせ給ふを、小若君、「されどそれは、いと疾く見て、『雨に濡れたるなど、面伏せなり』といひ侍りつ」と申し給へば、いみじうねたがらせ給ふもをかし。さて八日九日の程にまかづるを、「今少し近うなして」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる晝つ方、「花の心開けたりや。いかにいかに」と宣はせたれば、「秋はまだしく侍れど、夜に九度なむのぼる心地し侍る」など聞えさせつ。

出でさせ給ひし夜、車の次第もなく、まづまづと乘り騒ぐが憎ければ、さるべき人三人と、「なほこの車に乘るさまのいと騒がしく、祭のかへさなどのやうに、倒れぬべく惑ふ、いと見苦し。ただささば れ、乘るべき車なくてえ參らずば、おのづから聞し召しつけて、賜はせもしてむ」など笑ひ合ひて立てる前より、押し凝りて、惑ひ乘り果てて、「かうか」といふに、「まだここに」といらふれば、宮司寄り來て、「誰誰かおはする」と問ひ聞きて、「いと怪しかりけることかな。今は皆乘り給ひぬらむとこそ思ひつれ。こはなどてかくは後れさせ給へる。今は得選を乘せむとしつるに、珍かなりや」など驚きて寄せさすれば、「さばまづ、その御志ありつらむ人を乘せ給ひて、次にも」といふ聲聞き付けて、「けしからず腹ぎたなくおはしけり」などいへば乘りぬ。その次には、まことに御厨子が車にあれば、火もいと暗きをわびて、二條の宮に參り着きたり。御輿は疾く入らせ給ひて、皆しつらひ居させ給ひけり。「ここに呼べ」と仰せられければ、右京、小左近などいふ若き人人、參る人毎に見れど、なかりけり。下るるに隨ひ、四人づつ御前に參り集ひてさぶらふに、「怪し、無きか。いかなるぞ」と仰せられけるも知らず。ある限下り果ててぞ、辛うじて見付けられて、「かばかり仰せらるるには、などかく遲く」とて、ひきゐて參るに見れば、いつの間にかうは、年頃の御住居の様に、おはしましつきたるにかとをかし。「いかなれば、かう何かと尋ぬばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるるに、とかくも申さねば、もろ共に乘りたる人、「いとわりなし。さいはての車に侍らむ人は、いかでか疾くは參り侍らむ。これもほとほとえ乘るまじく侍りつるを、御厨司がいとほしがりて、讓り

○御厨子―御厨子所の女官略の。
○小左近―中宮の女房、傳未詳。
○さいはて―最終の湯桶よみ。

侍りつるなり。暗う侍りつる事こそわびしう侍りつれ」と、笑ふ笑ふ啓するに、「行事する者のいと怪しきなり。又などかは、心知らざらむ者こそつつまめ。右衛門などはいへかし」など仰せらる。「されどいかでか、走り先だち侍らむ」などいふも、片への人、憎しと聞くらむかし。「様悪しうて、かく乗りたらむもかしこかるべき事かは。定めたらむ様の、やむごとなからむこそよろしからめ」と、物しげに思し召したり。「おり侍るほどの待遠に苦しきによりてにや」とぞ申しなほす。御経のことに、明日渡らせおはしまさむとて、今宵参りたり。南の院の北面にさし覗きたれば、高坏どもに火をともして、二人三人四人、さるべきども、屏風引き隔てつるもあり。几帳なかに隔てたるもあり。又、さらでも集まり居て、衣ども綴ぢ重ね、裳の腰さし、化粧ずるさまは、更にもいはず、髪などいふものは、明日より後はあり難げにぞ見ゆる。「寅の時になむ渡らせ給ふべかなる。などか今まで参り給はざりつる。扇もたせて尋ね聞ゆる人ありつ」など告ぐ。さて、まことに寅の時かと、さうぞきだちてあるに、明け過ぎ日もさ

○右衛門―中宮の女房、傳未詳。
○物しげ―不機嫌。
○おり侍る―局になり。
○渡らせ―積善寺になり。
○今宵参り―一旦おりて、今夜また参りたる也。
○寅の時―午前四時。
○さうぞき―装束の字音を活用したる語。

し出でぬ。西の對の唐庇になむ、さし寄せて乗るべきとて、あるかぎり、渡殿へ行くほどに、まだうひうひしき程なる今参どもは、いとつつましげなるに、西の對に殿住ませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房、車に乗せさせ給ふを御覧ずとて、御簾の中に、宮、淑景舎、三四の君、殿のうへ、その御弟、六所立ち並みておはします。車の左右に、大納言殿、三位の中将二所して、簾うち上げ、下簾引き上げて乗せ給ふ。皆うち群れてだにあらば、隠れ所やあらむ、四人づつ書立に隨ひて、それぞれと呼び立てて、乗せ給ふに、歩み行く心地、いみじうまことにあさましう、顯證なりともよのつねなり。御簾のうちに、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見苦しと御覧せむは、更にわびしきこと限なし。身より汗のあゆれば、繕ひ立てたる髪なども、あがりやすらむと覺ゆ。辛うじて過ぎたれば、車の許にいみじう恥かしげに、清げなる御様どもして、うち笑みて見給ふも、うつつならず。されど倒れず、そこまではいき著きぬるこそ、かしこき顔もなきかと覺ゆれど、皆乗り果てぬれば、引き出でて、二條の大路に

○殿のうへ―道隆の北の方。
○その弟―弟は妹。

榻立てて、物見車のやうにて立て並べたる、いとをかし。人もさ見るらむかしと、心ときめきせらる。四位五位六位など、いみじう多う出で入り、車のもとに來て、つくろひ物いひなどす。

まづ院の御迎に、殿をはじめ奉りて、殿上人地下など皆參りぬ。それ渡らせ給ひて後、宮は出でさせ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五、四つは尼車、一の御車は唐の御車なり。それに續きて尼の車、しりくちより水晶の珠數、薄墨の袈裟、衣などいみじくて、簾は上げず、下簾も薄色の裾すこし濃き、次にただの女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅をおし渡し、縑の表着ども、いみじうなまめかし。日はいとうららかなれど、空は淺綠に霞み渡れるに、女房の裝束の匂ひ合ひて、いみじき織物の、いろいろの唐衣などよりも、なまめかしうをかしきこと限なし。關白殿、その御つぎつぎの殿ばら、おはする限、もてかしづき奉らせ給ふ、いみじうめでたし。これら見奉りめで騷ぐ。この車どもの二十立て並べたるも、亦を

○院—女院。

○御車ごめ—院の御車をこめて。
○尼車—尼の乘りたる車。
○唐の御車—唐庇の車とも。すべて高大にて、屋根は唐破風なり。檳榔を葺飾る。太上天皇以下、親王又は攝關の乘用。
○しりくち—後口。車の前後。
○女房の十—女房の車十。
○縑—生絹の一種。

○知る人—夫妻の關係ある人。
○指貫を—婦人も乘馬などには指貫をはく。
○色聽され—禁色を聽されたりと也。織物は禁色の一。
○御輿—中宮のなり。
○めでたしと見奉り—院のをさす。
○なぎの花—御車の屋根飾の葱花なり。
○御綱張りて—輿の屋根より四方に綱を引くをいふ。
○頭の毛など—髮のたつなど。

かしと見ゆらむかし。いつしか出でさせ給はむなど待ち聞えさするに、いと久し。いかならむと心もとなく思ふに、辛うじて、采女八人馬に乘せて引き出づめり。青すそ濃の裳、裾帶、領巾などの風に吹きやられたる、いとをかし。豐前といふ采女は、醫師重正が知る人なり。蒲萄染の織物の指貫を着たれば、「重正は色聽されにけり」と、山の井の大納言は笑ひ給ふ。皆乘りつづきて立てるに、今ぞ御輿出でさせ給ふ。めでたしと見奉りつる御有樣に、これは較ぶべからざりけり。朝日はなばなとさしあがる程に、なぎの花いと際やかに輝きて、御輿の帷子の色、艶などさへぞいみじき。御綱張りて出でさせ給ふ。御輿の帷子のうちゆるぎたる程、まことに頭の毛など、人のいふは更に虛言ならず。さて後に髮惡しからぬ人もかこちつべし。あさましういつくしう、なほいかで、かかる御前に馴れ仕うまつるらむと、わが身もかしこうぞ覺ゆる。御輿過ぎさせ給ふほど、車の榻ども、一たびに昇きおろしたりつる、また牛どもかけて、御輿のしりに續きたる心地の、めでたう興ある有樣、いふ方なし。

おはしましつきたれば、大門のもとに、高麗、唐土の樂して、獅子、狛犬躍り舞ひ、笙の音、鼓の聲に物も覺えず。こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらむと、空に響きのぼるやうに覺ゆ。内に入りぬれば、いろいろの錦の揚張に、御簾いと青くてかけ渡し、屏幔など引きたる程、なべてただに、この世と覺えず。御棧敷にさし寄せたれば、又この殿ばら立ち給ひて、「疾くおりよ」と宣ふ。乘りつる所だにありつるを、今少しあかう顯證なるに、大納言殿、いと物物しく清げにて、御下襲のしり、いと長く所狹げにて、簾うちあげて、「はや」と宣ふ。繕ひ添へたる髪も、唐衣の中にてふくだみ、怪しうなりたらむ、色の黒さ赤ささへ見分かれぬべき程なるが、いとわびしければ、ふとも得おりず。「まづしりなるこそは」などいふ程に、それも同じ心にや、「しりぞかせ給へ。辱なし」などいふ。「羞ぢ給ふかな」と笑ひて立ち返り、辛うじて下りぬれば、寄りおはして、「『むねたかなどに見せで、隱して下ろせ』と、宮の仰せらるればきたるに、思ひぐまなき」とて、引きおろしてゐて參り給ふ。さ聞えさせ給ひつらむと思ふも辱なし。

○揚張—幄。幕を屋の如くに張る。
○屏幔—幕。
○この殿ばら—道隆の子息達。
○むねたか—未詳。藤原致孝か。

參りたれば、はじめ下りける人どもの、物の見えぬべき端に、八人ばかり出で居にけり。一尺よ二尺ばかりの高さの長押の上におはします。「ここに立ち隱して、ゐて參りたり」と申し給へば、「宮「いづら」とて、几帳のこなたに出でさせ給へり。まだ唐の御衣も奉りながら、おはしますぞいみじき。紅の御衣よろしからむや。中に唐綾の柳の御衣、蒲萄染の五重の御衣に、赤色の唐の御衣、地摺の唐の薄物に、象眼重ねたる御裳など奉りたり。物の色、更になべてのに似るべきやうなし。「我をばいかが見る」と仰せらる。「清いみじうなむ候ひつる」なども、言に出でてはよの常にのみこそ。「久しうやありつる。それは宮の大夫の、院の御供に來て人に見えぬる、おなじ下襲ながら、宮の御供にあらむわろしと、人思ひなむとて、こと下襲縫はせ給ひける程に、遲きなりけり。いと好き給へりな」とてうち笑はせ給ふ。いと明らかに晴れたる所は、今少しけざやかにめでたう、御額上げさせ給へる釵子に、御分け目の御髪の、いささか寄りてしるく見えさせ給ふなどさへぞ、聞えむ方なき。三尺の御几帳一よろひをさしちがへ

○唐の御衣—唐衣ないふ。
○紅の御衣—打衣なるべし。
○象眼—帛紙に押したる泥繪なり。
○宮の大夫—中宮大夫。ここは道長。
○一よろひ—一雙。

○忠君―右大臣藤原師輔の子。
○富の小路の右大臣―藤原顯忠。宰相の君は、顯忠の子右馬頭重輔の女。

て、こなたの隔にはして、その後には、疊一ひらを、長ざまに緣をして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは、殿の御伯父の兵衞の督忠君と聞えけるが御女、宰相の君とは富の小路の右大臣の御孫、それ二人ぞ上に居て見給ふ。御覽じ渡して、「宮宰相はあなたにいきて、うへ人どもの居たる所にて見よ」と仰せらるるに、心得て、「宰相ノ君ここに三人は、いとよく見侍りぬべし」と申せば、「宮さば」とて召し上げさせ給へば、下に居たる人人、「殿上許さるる小舍人なめり」と笑へど、「下ノ人こは笑はせむと思ひ給へるか」といへば、「又下ノ人うまさへの程ぞ」などいへど、そこに入り居て見るは、いと面正し。かかる事などをみづからいふは、吹語にもあり、又、君の御爲にもかろがろしう、かばかりの人をさへ思しけむなど、おのづから物知り、世の中もどきなどする人は、あいなく畏き御事にかかりて、辱なけれど、ある事などは、又いかがは。誠に身の程に過ぎたる事もありぬべし。

○小舍人―用事の時のみ殿上に召上げらるる也。
○うまさへの程―馬副の童のほど。馬頭の女の宰相の君のわきに著きたれば、馬副と戲れたり。
○吹語―吹聽。

院の御棧敷、所所の棧敷ども見渡したるめでたし。殿はまづ院の御棧敷に參り給ひて、暫しありて、ここに參り給へり。大納言二所。三位の中將は、陣に仕う

○大納言二所―伊周、道頼。

まつりけるままにて、調度を負ひて、いとつきづきしうをかしうておはす。殿上人、四位五位、こちたううち連れて、御供に侍ひ並み居たり。入らせ給ひて見奉らせ給ふに、女房あるかぎり、裳、唐衣、御匣殿まで着給へり。殿のうへは、裳のうへに小袿をぞ着給へる。「繪に描きたるやうなる御樣どもかな。今以來今日はとな申し給ひそ。三四の君、宮の御裳脱がせ給へ。この中の主君には、御前こそおはしませ。御棧敷の前に陣を居ゑさせ給へるは、おぼろけの事か」とてうち泣かせ給ふ。げにと、見る人も涙ぐましきに、赤色に櫻の五重の唐衣を着たるを御覽じて、「法服一くだり足らざりつるを、俄に惑ひしつるに、これをこそ借り申すべかりけれ。さらずばもし又、さやうの物を切りしじめたるにか」と宣はするに、又笑ひぬ。大納言殿少ししぞき居給へるが、聞き給ひて、「清僧都のにやあらむ」と宣ふ。一言として、をかしからぬ事ぞなきや。僧都の君、赤の薄物の御衣、紫の御袈裟、いと薄き色の御衣ども、指貫着給ひて、頭つきの青う美しげに、地藏菩薩の御樣にて、女房にまじりありき給ふも、いとをかし。

○三位中將―隆家。
○調度を負ひて―近衞の武官なれば、弓箭を帶す。
○宮の御裳脱がせ―唐衣、裳は長上に對する禮裝なれば、この中にての長上たる中宮にはその要なきなり。
○陣を居ゑ―御座所に陣をたつるは中宮なれば也。
○赤色に―赤色の袿に。
○櫻の五重の唐衣―五重の綵絲にて、櫻の模樣をおりたる唐衣。
○法服―僧衣。
○清僧都―清少納言の赤色の唐衣の法服の色に似たるより、關白殿の戲れ給へるにつきて、

又清少納言を清僧都と戯れいへる也。
○僧都の君―隆圓。

人人僧綱の中に、威儀具足してもおはしまさで、見苦しう女房の中に」など笑ふ。父の大納言殿の御前より、松君ゐて奉る。蒲萄染の織物の直衣、濃き綾のうちたる、紅梅の織物など着給へり。御供に例の四位五位、いと多かり。御桟敷にて、女房の中にいだき入れ奉る。何事の過ちにか、泣きののしり給ふさへ、いとはえばえし。

事始りて、一切經を、蓮の花の紅きに、一花づつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位、何くれまでもて渡る、いみじう尊し。大行道、導師まゐり、回向暫し待ちて、舞ひなどする、日ぐらし見るに、目もたゆく苦し。うちの御使に、五位の藏人參りたり。御桟敷の前に、胡床立てて居たるなど、げにぞなほめでたき。夜さりつ方、式部の丞則理參りたり。「『やがて夜さり入らせ給ふべし。御供に侍へ』と、宣旨侍りつ」とて歸りも參らず。宮はなほ、「歸りて後に」と宣はすれども、又、藏人の辨參りて、殿にも御消息あれば、「只仰のまま」とて入らせ給ひなむとす。院の御桟敷より、「ちかの鹽竈」などいふ御消息、をかしき物なども

○蓮の花―作花なり。
○大行道―行道とは、法會に僧樂行列して、讀經しながら、本尊佛の周圍を練りあるくこと。
○則理―源氏。
○藏人の辨―高階信順。
○ちかの鹽竈―續後撰集「みちのくの千賀の鹽竈ちかながらからきは人にあはぬなりけり」。この歌によそへて、近くおはしましながら、中宮に御對面なきことをくやしく思ふ由を、女院より申送り給へる也。

て參り通ひたるなどもめでたし。事果てて、院還らせ給ふ。院司、上達部など、この度は、片へぞ仕うまつり給ひける。宮は内へ入らせ給ひぬるも知らず、女房の從者どもは、二條の宮にぞおはしまさむとて、そこに皆いき居て、待てど待てど見えぬ程に、夜いたう更けぬ。内には宿直物もて來なむと待つに、きよく見えず。あざやかなる衣の身にもつかぬを着て、寒きままに憎み腹立てどかひなし。つとめて來たるを、「いかにかく心なきぞ」などいへど、陳ぶることもさいはれたり。又の日雨降りたるを、殿は「これになむ、わが宿世は見え侍りぬる。いかが御覽ずる」と聞えさせ給ふ。御心おちゐることわりなり。

○九條錫杖―佛書の名、一卷九條。一條を唱ふる毎に、錫杖を振る。
○念佛の回向―念佛の後に唱ふる回向文。
○歌ほ―謠物ほ。
○神樂歌―神を祭るに用ふ。本末二座に歌ふ。

二百三十八段

尊きもの　九條錫杖。念佛の回向。

二百三十九段

歌は　杉たてる門。神樂歌もをかし。今樣は長くて曲づきたる。風俗よく謠ひたる。

○今様―今様歌は當世風なる歌。
○風俗―風俗歌はもと俗謠なるが、上流紳士の間に行はれたり。
○夏蟲の色―蟬の羽の色。
○ふくさ―表裏同色の絹地。
○松の葉云云―松がさね。表青裏紫。
○青葉―青朽葉か。
○練色―薄黄色。

二百四十段

指貫は　紫の濃き。萌黄。夏は二藍。いと暑き頃、夏蟲の色したるも涼しげなり。

二百四十一段

狩衣は　香染の薄き。白き。ふくさの赤色。松の葉色したる。青葉。櫻。柳又青き。藤。男は何色の衣も。

二百四十二段

單衣は　白き。日の裝束の紅のひとへ袙など、かりそめに着たるはよし。されど、なほ色黄ばみたる單衣など着たるは、いと心づきなし。練色の衣も着たれど、なほ單衣は白うてぞ、男も女もよろづの事まさりて。

二百四十三段

わろきものは　詞の文字怪しく使ひたるこそあれ。只文字一つに、怪しくも、あてにも、卑しくもなるは、いかなるにかあらむ。さるはかう思ふ人、殊に勝れてもえあらじかし。いづれを善き惡しきとは知るにかあらむ。されど、人をば知らじ。只さうち覺ゆるなり。何事をいひても、「その事させむとす」、「いはむとす」といふを、と文字を失ひて、只「言はむずる」、「里へ出でむずる」などいへば、やがていとわろし。まして文に書きては、いふべきにもあらず。物語こそ惡しう書きなどすれば、いひがひなく、作人さへいとほしけれ。「なほす」、「定本のまま」など書きつけたる、いとくちゝ惜し。「ひてつくるまに」などいふ人もあり。もとむといふ事を、「みとむ」と皆いふめり。いと怪しきことを、男などはわざと繕はで、殊更にいふは惡しからず。わが詞にもてつけていふが心劣りするなり。

○惡しう書き―書きは傳寫するをいふ。
○定本―校訂の原本。
○ひてつくるま―一つ車の訛。
○躑躅―表は蘇枋、裏は青打。又表は白、裏は蘇枋。
○蘇方がさね―表は白璧、裏は濃打。
○青色は云云―青色、紫は地紙の色。赤、綠は骨の色。

二百四十四段

下襲は　冬は躑躅、掻練がさね、蘇枋がさね。夏は二藍、白襲。

二百四十五段

扇の骨は　青色は赤き。紫は綠。

二百四十六段

檜扇は　無紋。唐繪。

二百四十七段

神は　松の尾。八幡、この國の帝にておはしましけむこそ、いとめでたけれ。行幸などに、なぎの花の御輿に奉るなど、いとめでたし。大原野。賀茂は更なり。稲荷。春日いとめでたく覺えさせ給ふ。佐保殿などいふ名さへをかし。平野はいたづらなる屋ありしを、「ここは何する所ぞ」と問ひしかば、御輿宿といひしもめでたし。忌垣に蔦などの多くかかりて、紅葉の色色ありし、「秋にはあへず」と、貫之が歌思ひ出でられて、つくづくと久しう立たれたりし。みこもりの神、いとをかし。

二百四十八段

崎は　唐崎。伊加が崎。三保が崎。

二百四十九段

屋は　丸屋　あづま屋。

○松尾―大山咋神に別雷神を配祀す。
○大原野―春日の神を勸請す。
○春日―武甕槌、經津主、兒屋根命に姫神を配祀す。
○平野―今木、久度、古關神に比賣神を配祀す。
○秋にはあへず―古今集「千早ぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり」。
○みこもりの神―水分（ミクマリ）の神、大和の宇陀吉野葛城などに祀る。

二百五十段

時奏するいみじうをかし。いみじう寒きに、夜中ばかりなどに、こほこほとこほめき、沓ずり來て、弦打などして、「なん家の某、時丑三つ、子四つなど、あてはかなる聲にいひて、時の杙さす音など、いみじうをかし。「子九つ、丑八つ」などこそ、さとびとびたる人はいへ、すべて何も何も、四つのみぞ杙はさしける。

二百五十一段

日のうららうらとある晝つ方、又、いたう夜更けて、子の時などにもなりぬらむかし、大殿籠りおはしましてにやなど想ひ參らする程に、「主上男どもと召したるこそ、いみじうをかしけれ。夜中ばかりに、又、御笛の聞えたる、いみじうめでたし。

二百五十二段

成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもいとをかしうおはす。伊豫の守兼資が女の忘られて、親の伊豫へゐて下りしほど、いかに哀なりけむとこそ覺えしか。曉にいくとて、今宵おはしまして、在明

○弦打―鳴絃。
○なん家の某云云―近衞の官人まづ名のりして、時を奏する也。
○時の杙さす音―清涼殿の殿上の小庭に時の簡あり、それを杙に立つる音。
○子九つ、丑八つ云云―當時の一時は四刻にて、九つも、八つもなし。九つ八つは打鼓の數なり。卽ち子午の刻には九下、丑未の刻には八下。
○入道兵部卿の宮―致平親王。
○兼資―源氏。

の月に歸り給ひけむ直衣姿などこそ。

そのかみ常におはして物語し、人の上などわろきはわろしなど宣ひしに、物忌などくすしうする者の、名をさうにてもたる人のあるが、他人の子になりて、平などいへど、只元のさうを、若き人人言種にて笑ふ。有樣も殊なる事なし。兵部とて、をかしき方なども難きが、流石に人などにさしまじり心などのあるは、御前わたりに、「見苦し」など仰せらるれど、腹ぎたなく、告ぐる人もなし。一條院に造られたる一間の所には、つらき人をば更に寄せず。東の御門につと向ひて、をかしき小廂に、式部のお許もろ共に、よるも晝もあれば、上も常に物御覽じに出でさせ給ふ。今宵は皆内に寢むとて、南の廂に二人臥しぬる後に、いみじう敲く人のあるに、うるさしなどいひ合はせて、寢たる樣にてあれば、尙いみじう篤ましう呼ぶを、「宮あれおこせ。虛寢ならむ」と仰せられければ、この兵部來て起せど、いみじう寢たる樣なれば、「更に起き給はざりけり」といひにいきたるが、やがて居著きて物いふなり。暫しかと思ふに、夜いたう更けぬ。權中將に

○名をさうにて云云—藤式部赤染衞門の如く、その名を姓にてつきたるないふ。さうは姓の字音便。

○權中將—成信。

こそあなれ。「清少納言こは何事をかはいふ」とて、只みそかに笑ふも、いかでか知らむ。曉までいひ明して歸りぬ。「同上この君いとゆゆしかりけり。更におはせむに物いはじ。何事をさはいひ明すぞ」など笑ふに、遣戸をあけて、女は入りぬ。

つとめて、例の廂に物いふを聞けば、「兵部雨のいみじう降る日來たる人なむ、いとあはれなる。日頃おぼつかなうつらき事ありとも、さて濡れて來らば、憂き事も皆忘れぬべし」とは、などていふにかあらむを。夜べもそれがあなたの夜も、すべてこの頃は、うち頻り見ゆる人の、今宵もいみじからむ雨に障らで來たらむは、一夜も隔てじと思ふなめりと、あはれなるべし。さらで日頃も見えず、おぼつかなくて過ぐさむ人の、かかる折にしも來むをば、更にまた、志あるにはえせじとこそ思へ。人の心心なればにやあらむ。物見知り思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどをば語らひて、數多いく所もあり、元よりのよすがなどもあれば、繁うしも得來ぬを、なほさるいみじかりし折に來たりし事など、人にも語り繼がせ、身を譽められむと思ふ人の仕業にや。それもむげに志なからむに

○それがあなたの夜—一昨夜。

○元よりのよすが—本妻なるべし。

は、何しにかは、さも作事(つくりごと)しても見えむと思はむ。されど、雨の降る時は、只むつかしう、今朝まで晴れ晴れしかりつる空とも覺えず、憎くて、いみじき細殿の、めでたき所とも覺えず。ましていとさらぬ家などは、疾く降り止みねかしとこそ覺ゆれ。月のあかきに來たらむ人はしも、十日、二十日、一月、もしは一年にても、まして七八年になりても、思ひ出でたらむは、いみじうをかしと覺えて、え逢ふまじうわりなき所、人目つつむべきやうありとも、必ず立ちながらも、物いひて返し、又とまるべからむをばとどめなどしつべし。

月のあかきを見るばかり、遠く物思ひやられ、過ぎにし事の、憂かりしも、嬉しかりしも、をかしと覺えしも、只今のやうに覺ゆる折やはある。狛野(こまの)の物語は、何ばかりをかしき事もなく、詞も舊めき、見所多からねど、月に昔を思ひ出でて、蟲ばみたる蝙蝠(かはほり)取り出でて、「もとこし駒に」といひて立てるが、いとあはれなるなり。雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいと憎くぞある。やむごとなき事、面白かるべき事、尊くめでたかるべき事も、雨だに降れば、

○もとこし駒に—大和物語、後撰集に「夕やみは道もみえねど古里はもとこし駒にまかせてぞくる」。

いふかひなくくち惜しきに、何かその濡れてかこちたらむがめでたからむ。げに交野(かたの)の少將もどきたる落窪(おちくぼ)の少將などはをかし。それも夜べも一昨日の夜も、ありしかばこそをかしけれ。足洗ひたるぞ憎くきたなかりけむ。さらでは何か。風などの吹く荒荒しき夜來たるは、賴もしくてをかしうもありなむ。雪こそいとめでたけれ。「忘れめや」など獨ごちて、忍びたることは更なり。いとさあらぬ所も、直衣などは更にもいはず、狩衣(うへのきぬ)、袍(ほう)、藏人の青色などの、いと冷やかに濡れたらむは、いみじうをかしかるべし。綠衫(ろうさう)なりとも、雪にだに濡れなば憎かるまじ。昔の藏人は、よるなど人の許などに、只青色を着て、雨に濡れても絞りなどしけるが、今は畫だに着ざめり。只綠衫をのみこそかづきためれ。衞府(ゑふ)などの着たるは、ましていとをかしかりしものを。かく聞きて、雨にありかぬ人やあらむとすらむ。月のいとあかき夜、紅の紙のいみじうあかきに、只「あらず」とも書きたるを、廂(ひさし)にさし入れたるを、月にあてて見しこそをかしかりしか。雨降らむ折は、さはありなむや。

○もどき—非難。
○落窪の少將—落窪物語中の主人公。
○足洗ひ—落窪に、帶刀の曹司にてまづ水とて、御足清すとあり。
○忘れめや—萬葉集「わが命またけむかぎり忘れめやいや日にけには思ひますとも」。
○綠衫—六位の當色の服。
○衞府などの—衞府たかねたる藏人などの青色を着たるはと也。
○あらず—用事にてもなしと也。月をいかが見給ふの餘意あり。

○明け立てば―夜の明くれば。
○際際し―際立つの形容詞格。
○音もせねば―後朝の文なき也。
○水ます雨の―出所未詳。或は古今集「まこも刈る淀の澤水雨ふれば常よりことにまさるわが戀」を引けるか。

二百五十三段

常に文おこする人の、「何かは。今はいふかひなし」などいひて、又の日音もせねば、さすがに明け立てば、さしいづる文の見えぬこそさうざうしけれと思ひて、「さても際際しかりける心かな」などいひて暮しつ。又の日、雨いたう降る晝まで音もせねば、「むげに思ひ絶えにけり」などいひて、端の方に居たる夕暮に、笠さしたる童のもてきたるを、常よりも疾くあけて見れば、「水ます雨の」とある、いと多く詠み出しつる歌どもよりはをかし。只、今朝はさしも見えざりつる空の、いと暗うかき曇りて、雪のかきくらし降るに、いと心細く見出だす程もなく、白く積りて、なほいみじう降るに、隨身だちて、細やかにびびしきをのこの、傘さして、そばの方なる屏の戸より入りて、文をさし入れたるこそをかしけれ。いと白きみちのく紙、白き色紙の結びたる上に引き渡しける墨の、ふと氷りにければ、すそ薄になりたるをあけたれば、いと細く卷きて、結びたる卷目は、こまごまと窪みたるに、墨のいと黑う薄く、行せばに、うらうへ書き亂りたるを、

○大將―近衞の大將。
○五大尊―不動、降三世、大威德、軍荼利夜叉、金剛夜叉明王。
○御齋會―正月八日より七日間、宮中にて最勝王經を講ずる法會。
○熾盛光の御修法―金輪佛頂を本尊として、天變兵亂を鎭むる爲に修する法。
○のぼりおり―下知の詞。

うち返し久しう見るこそ、何事ならむと、よそにて見遣りたるもをかしけれ。まいてうちほほ笑む所は、いとゆかしけれど、遠う居たるは、黑き文字などばかりぞ、さなめりと覺ゆるかし。額髮長やかに、面やうよき人の、暗きほどに文を得て、火ともす程も心もとなきにや、火桶の火を挾みあげて、たどたどしげに見居たるこそをかしけれ。

二百五十四段

きらきらしきもの　大將の御前追ひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人の式部の丞、白馬の日大路ねりたる。御齋會、左右の衞門の佐摺衣えうする。季の御讀經。熾盛光の御修法。神のいたく鳴る折に、雷鳴の陣こそいみじう恐ろしけれ。左右の大將、中少將などの、御格子のつらに侍ひ給ふ、いとをかしげなり。果てぬる折、大將の仰せて、「のぼりおり」と宣ふらむ。坤元錄の御屏風こそ、をかしう覺ゆる名なれ。月並の御屏風もをかし。漢書の御屏風は、ををしくぞ聞えた

○坤元錄の云云―坤元錄に見えたる山河のさまを描きたる屏風。坤元錄は支那の地誌。
○漢書の云云―漢書に見えたる事蹟を描ける屏風。漢書はおもに前漢書を稱す。班固の撰百卅八卷。
○月並の御屏風―年中行事の屏風。

二百五十五段

方違などして夜深くかへる、寒きことといとわりなく、頤なども皆落ちぬべきを、辛うじて來つきて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黑みたる所なくめでたきを、細かなる灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじう嬉しけれ。物などいひて、火の消ゆらむも知らず居たるに、異人の來て、炭入れておこすこそ、いと憎けれ。されど、めぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。皆火を外樣に掻き遣りて、炭を重ね置きたる頂に、火ども置きたるが、いとむつかし。

二百五十六段

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子參らせて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり侍ふに、「少納言よ。香爐峯の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子上げさせて、御簾高く卷き上げたれば、笑はせ給ふ。人人も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。「なほこの宮の人には、さるべきなめり」といふ。

○香爐峯の雪は―白居易の詩に「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」。

○しろき水―清水。
○いかけ―沃懸け。そそぎかくること。

二百五十七段

陰陽師のもとなる童こそ、いみじく物は知りたれ。祓などしに出でたれば、祭文など讀む事、人はなほこそ聞け。そと立ち走りて、「しろき水いかけさせよ」ともいはぬに、しありく樣の、例知り、いささか主に物いはせぬこそ羨ましけれ。さらむ人もがな。使はむとこそ覺ゆれ。

二百五十八段

三月ばかり物忌しにとて、かりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはかばかしからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで、葉廣う見えて憎げなるを、「あらぬものなめり」といへば「かかるもあり」などいふに、

さかしらに柳の眉のひろごりて春のおもてを伏する宿かな。

とこそ見えしか。

その頃又おなじ物忌しに、さやうの所に出でたるに、二日といふ晝つ方、いとどつれづれまさりて、只今も參りぬべき心地する程にしも、仰言あれば、いと嬉し

くて見る。淺緑の紙に宰相の君、いとをかしく書き給へり。

「宮いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮しわづらふ昨日今日かな」

となむ。私には、「宰相ノ君今日しも千年の心地するを、曉だに疾く」とあり。この君の宣はむだにをかしかるべきを、まして仰言のさまには、おろかならぬ心地すれど、啓せむ事とは覺えぬこそ。

「清雲のうへに暮しかねける春の日を所がらともながめつるかな」

私には、「清今宵のほども、少將にやなり侍らむずらむ」とて、曉に參りたれば「宮昨日の返し、暮しかねける、いと憎し。いみじう譏りき」と仰せらるるいとわびしう、眞にさることなり。

二百五十九段

清水に籠りたる頃、茅蜩のいみじう鳴くを、あはれと聞くに、わざと御使して宣はせたりし、

「宮山ちかき入相の鐘の聲ごとに戀ふる心の數は知るらむ。

○私には—宰相の君の私の文には。

○少將にや云云—深草少將の百夜女の許に通はんとて、九十九夜ゆきて、一夜を待あへずして失せにける物語によれるにや。

○清水—清水の觀音。京都にあり。

○たび—度に旅をかく。

ものを、こよなの長居や」と書かせ給へり。紙などのなめげならぬも、取り忘れたるたびにて、紫なる蓮の花びらに書きて參らする。

二百六十段

十二月廿四日、宮の御佛名の、初夜の御導師聞きて出づる人は、夜中も過ぎぬらむかし。日頃降りつる雪の、今朝はやみて、風などのいたう吹きつれば、垂氷のいみじうしだり、土などこそむらむら黑きなれ、屋のうへは只おしなべて白きに、あやしき賤の屋も面隱して、在明の月の隈なきに、いみじうをかし。白金などを葺きたるやうなるに、水晶の瀧などいはまほしきやうにて、長く短く、ことさら懸け渡したると見えて、いふにも餘りてめでたきに、下簾も懸けぬ車の簾を、いと高く上げたれば、奥までさし入りたる月に、薄色、紅梅、白きなど、七つ八つばかり着たるうへに、濃き衣のいとあざやかなるつやなど、はえてをかしう見ゆる傍に、蒲萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣のいと白き紐を解きたれば、脱ぎ垂れられて、いみじうこぼれたり。指

貫の片つ方は、とじきみの外に踏み出だされたるなど、道に人の逢ひたらば、をかしと見つべし。月影のはしたなさに、うしろ様へすべり入りたるを、引き寄せあらはになされて、わぶるもをかし。「凜凜として氷鋪けり」といふ詩を、返す返す誦んじておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、いく所の近くなるもくち惜し。

○とじきみ―軾。車のなり。

○凜凜として云云―朗詠集に公乗億「秦甸一千餘里、凜凜氷鋪」。

二百六十一段

宮仕する人人の出で集まりて、おのが君君の御事めで聞え、宮の内外のはしの事ども、かたみに語り合はせたるを、その家あるじにて聞くこそをかしけれ。家廣く清げにて、親族は更なり、只打ち語らひなどする人には、宮仕人、片つ方にするゑてこそあらまほしけれ。さるべき折は、一所に集まり居て物語し、人の詠みたる歌、何くれと語りあはせ、人の文などもてくる、もろ共に見返事書き、又睦まじう來る人もあるは、清げにうちしつらひて入れ、雨など降りてえ歸らぬも、をかしうもてなし、參らむ折は、その事見入れて、思はむ様にして、出だし立てなどせばや。よき人のおはします御有様など、いとゆかしきぞ。けしからぬ心にやあらむ。

二百六十二段

見習ひするもの　欠伸。乳兒ども。なまけしからぬえせ者。

二百六十三段

打ち解くまじきもの　惡しと人にいはるる人。さるは、よしと知られたるよりは、うらなくぞ見ゆる。船の路。

日のうららかなるに、海の面のいみじうのどかに、淺緑うちたるを引き渡したるやうに見えて、いささか恐ろしき氣色もなきに、若き女の、袙ばかり着たる、侍の者の若やかなるもろ共に、櫓といふ物押して、歌をいみじう歌ひたる、いとをかしう、やむごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたう吹き、海の面の、ただ荒れに惡しうなるに、物も覺えず、泊るべき所に漕ぎつくる程、船に浪の懸けたる様などは、さばかり、なごかりつる海とも見えずかし。思へ

○うらなく―裏なく。奥底なく。

○淺緑うちたる―淺緑の衣の打ちたる。

ば、船に乗りてありく人ばかり、ゆゆしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、様はかなき物に乗りて、漕ぎ行くべきものにぞあらぬや。ましてそこひも知らず、千尋などもあらむに、物いと多く積み入れたれば、水際は只一尺ばかりだになきに、下衆どもの、いささか恐ろしとも思ひたらず、走りありき、つゆ荒くもせば沈みやせむと思ふに、大きなる松の木などの、二三尺ばかりにてまろなるを、五つ六つ、ほうほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。屋形といふ物にぞおはす。されど、奥なるはいささか頼もし。端に立てる者どもこそ、目くるる心地すれ。早緒とつけて、櫓とかにすげたる物の弱げさよ。絶えなば何にかはならむ、ふと落ち入りなむを。それだにいみじう太くなどもあらず。わが乗りたるは清げに、帽額の簾かけ、妻戸あけ、格子上げなどして、されど、ひとしう重げになどもあらねば、只家の小さきにてあり。異船見やるこそいみじけれ。遠きはまことに、笹の葉を作りてうち散らしたるやうにぞ、いとよく似たる。泊りたる所にて、船毎に火ともしたる、をかしう見ゆ。はし舟とつけて、い

○そこひ—底のかぎり。

○屋形—屋形船。

○はし舟—遊艇。はしけ。

○あとのしら波—拾遺集に滿誓「世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆく舟のあとの白波」。

○腰につきたる物—海士の腰の栲縄なり。

○栲縄—楮の纖維にて作れる縄。

みじう小さきに乗りて漕ぎありくつとめてなど、いとあはれなり。「あとのしら浪」は、まことにこそ消えもてゆけ。よろしき人は、乗りてありくまじき事とこそなほ覺ゆれ。徒路も亦、いと恐ろし。されどそれは、いかにもいかも地に付きたれば、いと頼もし。海はなほゆゆしと思ふに、まいて海士の潜きしに入るは憂きわざなり。腰につきたる物絶えなば、いかにせむとなむ。をのこだにせば、さてもありぬべきを、女はおぼろげの心ならじ。舟に男は乗りて、歌などうち歌ひて、この栲縄を海に浮けありく。いと危くうしろめたくはあらぬにや。海士ものぼらむとては、その縄をなむ引く。取り惑ひ繰り入るるさまぞ、ことわりなるや。船の端をおさへて、放ちたる息などこそ、まことに只見る人だにしほたるるに、落し入れて漂ひありく男は、目もあやにあさまし。更に人の思ひかくべき業にもあらぬことにこそあめれ。

二百六十四段

右衛門の尉なる者の、えせ親をもたりて、人の見るに面伏など、見ぐるしう思

○盆を奉る―亡人の爲に盆供養をする。盆は盂蘭盆の略。地獄の苦を受くる者を救ふ佛事。
○道命―右大將藤原道綱の子。
○小野殿―道綱をいふか。その母上ならば、蜻蛉日記の著者なり。薪こるの歌も、拾遺集には、東宮大夫道綱母として出せり。
○普門寺―抄に六波羅にやとあり。
○薪樵る―釋尊の故事。
○斧の柄―晉の王質の故事。小野をいひかく。
○業平が母の宮―伊豆内親王。桓武帝の皇女。
○いよいよ見まく―古今集及び伊勢

ひけるが、伊豫の國よりのぼるとて、海に落し入れてけるを、人の心うがり、あさましがりける程に、七月十五日、盆を奉るとて急ぐを見給ひて、道命阿闍梨、

「わたつ海に親をおし入れてこのぬしの盆する見るぞ哀なりける。

と詠み給ひけるこそいとをかしけれ。

二百六十五段

又、小野殿の母上こそは。普門寺といふ所に、八講しけるを聞きて、又の日、小野殿に人人集まりて、遊し、文作りけるに、

「薪樵ること（小野殿ノ母上）はきのふに盡きにしを今日は斧の柄ここにくたさむ。

と詠み給ひけむこそめでたけれ。ここもとは打聞になりぬるなめり。

二百六十六段

又、業平が母の宮の、「いよいよ見まく」と宣へる、いみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけむこそ思ひやらるれ。

二百六十七段

物語に、内親王の長岡より、業平の中將に遣し給へる歌に「老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君かな」と見えたり。

をかしと思ひし歌などを、草子に書きて置きたるに、下衆のうち歌ひたるこそ心憂けれ。讀みにも讀むかし。

二百六十八段

よろしき男を、下衆女などの譽めて、「いみじう懷かしうこそおはすれ」などいへば、やがて思ひ貶されぬべし。譏らるるはなかなかよし。下衆に譽めらるるは、女だにわろし。又、譽むるままにいひ損ひつるものをば。

二百六十九段

大納言殿參り給ひて、文の事など講じ給ふに、例の夜いたう更けぬれば、御前なる人人、一二人づつ失せて、御屏風、几帳のうしろなどに、皆隱れ臥しぬれば、只一人になりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、丑四つと奏するなり。「明け侍りぬなり」と獨ごつに、大納言殿、「今更にな大殿籠りおはしましそ」とて、ぬべきものにも思したらぬを、うたて、何しにさ申しつらむと思へども、又人のあらばこそは紛れもせめ。上の御前の柱に寄り懸かりて、少しねぶらせ給へるを、「かれ（大納言）

○大納言殿―伊周。

見奉り給へ。今は明けぬるに、かく大殿籠るべきことかは」と申させ給へば、「げに」など、宮の御前にも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬ程に、長女が童の、鶏を捕へもてきて、「あす里へもていかむ」といひて、隠し置きたりけるが、いかがしけむ、犬の見つけて追ひければ、廊のさきに逃げ入りて、恐ろしう鳴きののしるに、皆人起きなどしぬなり。上もうち驚かせおはしまして、いかにありつる」ぞと尋ねさせ給ふに、大納言殿の、「聲明王の眠を驚かす」といふ詩を、高ううち出だし給へる、めでたうをかしきに、一人ねぶたかりつる目も、大きになりぬ。いみじき折の事かなと、上も宮も興ぜさせ給ふ。なほかかる事こそめでたけれ。又の日は、夜の御殿に入らせ給ひぬ。夜中ばかりに、廊に出でて人呼べば、「下るるか。われ送らむ」と宣へば、裳、唐衣は、屏風にうち懸けていくに、月のいみじう明くて、直衣のいと白う見ゆるに、指貫を長う踏みしだきて、袖をひかへて、「倒るな」といひてゐておはするままに、「遊子なほ殘の月に行けば」と誦んじ給へる、又、いみじうめでたし。「かやうの事めで惑ふ」とて笑ひ給へど、いかでか尚

○聲明王の―朗詠集に都良香「鷄人曉唱、聲驚二明王之眠一、鳧鐘夜鳴、響徹二暗天之聽一」。

○遊子なほ殘の月に―朗詠集に賈島「佳人畫飾二於晨粧一、鐵宮鐘動、遊子猶行二於殘月一、函谷雞鳴」。

いとをかしきものをば。

二百七十段

僧都の君の御乳母のままと、御匣殿の御局に居たれば、をのこのある、板敷のもと近く寄りきて、「辛い目を見候ひつる。誰にかは愁へ申し候はむ」と、泣きぬばかりの氣色にていふ。「何事ぞ」と問へば、「あからさまに物へまかりたりしまに、きたなく侍る所の燒け侍りにしかば、日頃は寄居蟲のやうに、人の家に尻をさし入れてなむさぶらふ。うまづかさの御秣積みて侍りける家より出でまうできて侍るなり。只垣を隔て侍れば、夜殿に寢て侍りけるわらはべも、ほとほと燒け侍りぬべくなむ。いささか物も取う出侍らず」などいひ居る、御匣殿も聞き給ひて、いみじう笑ひ給ふ。

「みまぐさをもやすばかりの春の日によどのさへなど殘らざるらむ」

と書きて、「これを取らせ給へ」とて投げ遣れば、笑ひののしりて、「このおはする人の家の燒けたりとて、いとほしがりて給ふめる」とて取らせたれば、「何の御短

○御匣殿の御局―貞觀殿ならん。

○寄居蟲―蟹の一種。

○うまづかさ―馬寮。

○みまぐさを云云―上句は春の日に若草のもゆるをよそへて、日に火をかけ、下句は夜殿に淀野をかけたり。

○短籍―短册。細長き紙札。人に給はる米鹽の數など記して、その人に與ふるにも用ふ。故にこの男、物給はる短籍と思へる也。

籍にか侍らむ。物いくらばかりにか」といへば、「女房」まづ讀めかし」といふ。「男」いかでか、片目もあき仕うまつらでは」といへば、「女房」人にも見せよ。只今召せば、とみにて上へ參るぞ。さばかりめでたき物を得ては、何をか思ふ」とて、皆笑ひ惑ひてのぼりぬれば、「ママ」人にや見せつらむ。さと聞きていかに腹立たむ」など、御前に參りて、ままの啓すれば、又笑ひさわぐ。御前にも、「などかく物ぐるほしからむ」と笑はせ給ふ。

二百七十一段

男は女親なくなりて、親一人ある、いみじく思へども、煩はしき北の方の出でき

○故上―卽ち女親。

て後は、内にも入れられず。裝束などの事は、乳母、また故上の人どもなどしてせさす。西東の對の程に、まらうどゐなどをかしう、屏風、障子の繪も、見所ありて住ひたり。殿上のまじらひの程、くち惜しからず人人も思ひたり。上にも御氣色よくて、常に召しつつ、御遊などの敵には思しめしたるに、なほ常に物歎かしう、世の中心に合はぬ心地して、すきずきしき心ぞ、片はなるまであるべき。上達部の、又なきにもてかしづかれたる妹一人あるばかりにぞ、思ふ事をも打ち語らひ、慰めなどするかし。

○まらうどゐ―客座敷。

○かたき―對手。

○あるべき―あるべきにさはなくてと解く。

二百七十二段

「定澄僧都に袿なし、すいせい君に袙なし」といひけむもこそをかしけれ。

二百七十三段

「まことや、下野にくだる」といひける人に、

「清おもひだにかからぬ山のさせも草誰かいぶきのさとは告げしぞ」

二百七十四段

ある女房の、遠江の守の子なる人を語らひてあるが、同じ宮人を語らふと聞きて怨みければ、「女房男親などもかけて誓はせ給へ。いみじき虚言なり。夢にだに見ず」となむいふ。いかがいふべき」といふと聞きて、

「清誓へ君遠つあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや」

○定澄云云―定澄は背高、すいせいは背ひくなれば、長き袿も長からず、短き袙も短からず、故に袿なし袙なしとはいふ也。

○おもひだに云云―思ひに火をかけ、さやうにの意のさとに里をかけたり。させも草はさしも草と同じ。灸に使ふもの。いぶきの里は下野都賀郡。

○濱名のはし見ざりきや―怪しき事の一端は見しかば親の遠江守を證人にして、向後を誓ひ給へと也。守に神、橋に端をかく。

○胸のいみじう走る―心の甚しく騒ぐ。
○逢坂は―逢坂に人に逢ふ意をよせ、胸の走るに走井をよせ、水に見付くなかく。走井は逢坂の關の清水なり。

便なき所にて、人に物をいひけるに、「胸のいみじう走る。などかくある」といひける答に、

「清逢坂は胸のみつねにはしり井のみつくる人やあらむと思へば」

二百七十六段

女のうは着は　薄色。蒲萄染。萌黄。櫻。紅梅。すべて薄色の類。

二百七十七段

唐衣は　あか色。藤。夏は二藍。秋は枯野。

二百七十八段

○大海―海部とも。海波に海松磯貝などの模様あるもの。

裳は　大海。

二百七十九段

汗衫は　春は躑躅、櫻。夏は青朽葉、朽葉。

二百八十段

織物は　紫。白き。萌黄に柏葉織りたる。紅梅もよけれども、なほ見ざめこよなし。

二百八十一段

紋は　葵。かたばみ。霰地。

二百八十二段

○片つ方のゆたけ―ゆきの一方を長くしたるをいふ。
○きれて―あきて。

片つ方のゆだけ着たる人こそ憎けれ。數多重ね着たれば、引かれて着にくし。綿など厚きは、胸などもきれて、いと見苦し。まぜて着るべき物にはあらず。なほ昔より、樣よく着たるこそよけれ。左右のゆだけなるはよし。それもなほ女房の裝束にては、所狹かめり。男の數多重ぬるも、片つ方重くぞあらむかし。清らなる裝束の織物、薄物など、今は皆さこそあめれ。今樣に、又さまよき人の着給はむ、いと便なきものぞかし。

二百八十三段

○彈正―内外を巡察し、非違を糺彈する官。人愛すくなき役なり。ここは蛸(スク)をいふ。
○宮の中將―源頼定。爲平親王の子。

かたちよき君達の、彈正にておはする、いと見苦し。宮の中將などの、くちをしかりしかな。

二百八十四段

病は　胸。物のけ。あしの氣。只そこはかとなく物食はぬ。十八九ばかりの人の、髪いとうるはしくて長ばかりにて、すそ房やかなるが、いとよく肥えて、いみじう色白う、顔愛敬づき、よしと見ゆるが、歯をいみじく病み惑ひて、額髪もしとどに泣きぬらし、髪の亂れかかるも知らず、面赤くて、抑へ居たるこそをかしけれ。八月ばかり、白き單衣のなよらかなるに、袴よき程にて、紫苑の衣の、いとあざやかなるを引き懸けて、胸いみじう病めば、友達の女房達など、代る代る來つつとぶらふ。外の方にも若やかなる君達あまた來て、「いといとほしき業かな。例もかくや惱み給ふ」など、事なしびに問ふ人もあり。心懸けたる人は、まことにいみじと思ひ歎き、人知れぬ中などは、まして人目思ひて、寄るにも近くもえ寄らず、思ひ歎きたるこそをかしけれ。いとうるはしく長き髪を引きゆひて、物つくとて起き上りたる氣色も、いと心苦しくらうたげなり。上にも聞し召して、御讀經の僧の聲よき賜はせたれば、几帳引き寄せてするたり。程もなきせばさなれば、とぶらひ人どもあまた來て、經聞きなどするも隱れなきに、目を配りつつ讀み居たるこそ、罪や得らむと覺ゆれ。

○あしの氣―脚氣。
○事なしびー何の事なけに。
○物つくー嘔吐する。

二百八十五段

心づきなきもの　物へもゆき寺へも詣づる日の雨。使ふ人の、「我をば覺さず。某こそ只今の時の人」などいふをほの聞きたる。人よりはなほ少し憎しと思ふ人の、おし量り言うちし、すずろなる物恨し、我さかしがる。心惡しき人の養ひたる子。さるはそれが罪にもあらねど、かかる人にしもと覺ゆる故にやあらむ。「數多あるが中に、この君をば思ひおとし給ひてや、憎まれ給ふよ」など荒らかにいふ。乳兒は思ひも知らぬにやあらむ、求めて泣き惑ふ、心づきなきなめり。大人になりても、思ひ後見もて騷ぐほどに、なかなかなる事こそ多かめれ。わびしく憎き人に思ふ人の、はしたなくいへど、添ひ付きてねむごろがる。いささか心地あしなどいへば、常よりも近く臥して、物食はせいとほしがり、その事となく思ひたるに、まつはれ追從し、取り持ちて惑ふ。

○養ひたる子―養君。乳を上げたる若君。

二百八十六段

宮仕人の許に來などする男の、其處にて物食ふこそ、いとわろけれ。食はする人も、いと憎し。思はむ人の、「まづ」など志ありていはむを、忌みたるやうにて、口をふたぎて、顔をもてのくべきにもあらねば、食ひをるにこそあらめ。いみじう醉ひなどして、わりなく夜更けてとまりたりとも、更に湯漬だに食はせじ。心もなかりけりとて來すば、さてなむ。里にて、北面より出だしたるはいかがせむ。それだになほぞある。

二百八十七段

初瀬に詣でて、局に居たるに、あやしき下衆どもの、うしろさしませつつ、居並みたる氣色こそないがしろなれ。いみじき心を起して詣でたるに、川の音などの恐ろしきに、樽階をのぼり困じて、いつしか佛の御顔を拜み奉らむと、局にいそぎ入りたるに、白き衣着たる法師、蓑蟲などやうなる者ども集まりて、立ち居額づきなどして、つゆばかりも所を置かぬは、押し倒しつべき心地こそすれ。

○北面―裏向の部屋にて、卽ち茶の間に當る。
○なほぞある―やはり憎しと也。
○うしろさしませ―背を我におしつけ。
○蓑蟲のやう―下賤なる者の形容。

いとやむごとなき人の局ばかりこそ、前拂あれ、よろしき人のは、制し煩ひぬかし。賴もし人の師を呼びていはすれば、「そこども少し去れ」などいふ程こそあれ、歩み出でぬれば、同じやうになりぬ。

二百八十八段

いひにくきもの　人の消息、仰言などの多かるを、ついでのままに、始めより奥まで、いといひにくし。返事また申しにくし。恥かしき人の、物おこせたる返事。大人になりたる子の、思はずなること聞きつけたる、前にてはいといひにくし。

二百八十九段

束帶は　四位五位は冬。六位は夏。宿直姿なども。

二百九十段

品こそ男も女もあらまほしきことなめれ。家の君にてあるにも、誰かはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使人ゆきて、おのづからいふべかめり。

○賴もし人の―一切の取まかなひを賴める僧。
○家の君―妻君。

まして交らひする人は、いとこよなし。猫の土に下りたるやうにて。

二百九十一段

工の物食ふこそ、いと怪しけれ。寝殿を建てて、東の對たちたる屋を造ると、て、工ども居並みて物食ふを、東面に出で居て見れば、まづもてくるや遅きと、汁物取りて皆飲みて、土器はついするつ。次にあはせを皆食ひつれば、おものは不用なめりと見るほどに、やがてこそ失せにしか。二三人居たりし者、皆させしかば、工のさがなめりと思ふなり。あいなの事どもや。

○ついするつ—突据ふの音便。
○あはせ—菜。
○おもの—飯。

二百九十二段

物語もせよ。昔物語もせよ。さかしらにいらへ打ちして、異人と物いひ紛らはす人、いとにくし。

二百九十三段

「ある所に、何の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねども、その心いたく好きたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて、在明の月のいみじう照りて面白きに、名残思ひ出でられむと、言の葉を盡していへるに、今は去ぬらむと遠く見送るほどに、えもいはず艶なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立蔀あいたる陰の方に添ひ立ちて、なほ往きやらぬさまもいひ知らせむと思ふに、「在明の月のありつつも」とうちいひて、さし覗きたる、かしこより五寸ばかりを去りて、火ともしたるやうなる月の光催されて、驚かさるる心地しければ、やをら立ち出でにけり」とこそ語りしか。

○在明の月のありつつも—拾遺集「長月のあり明の月のありつつも君しきまさば我こひめやも」。

二百九十四段

女房の參りまかでするには、車を借る折もあるに、心よういひて貸したるに、牛飼童の、例の牛よりもしもざまにうちいひて、いたう走り打つも、あなうたてと覺ゆかし。をのこどもなどの、物むつかしげなる氣色にて、いかで夜更けぬ先に、追ひて歸りなむといふは、なほ主の心おしはかられて、とみの事なりと、又いひ觸れむとも覺えず。業遠の朝臣の車のみや、夜中曉わかず、人の乘るに、いささかさる事なかりけむ、よくこそ敎へ習はしけれ。道に逢ひたりける女車の、

○牛飼童、をのこども—いづれも借りたる車のなり。
○又いひ觸れむ—又借用を頼まん。
○業遠—高階氏。

深き所におとし入れて、え引き上げて、牛飼の腹立ちければ、わが従者して打たせさへしければ、まして心のままに、いましめ置きたるにこそ。

二百九十五段

好きずきしくて獨住する人の、よるはいづらにありつらむ、曉に歸りて、まだねぶたげなる氣色にて、硯取り寄せ、墨こまやかに押し磨りて、事なしびに筆に任せてなどはあらず、心とどめて書くまひろげ姿をかしう見ゆ。白き衣どもの上に、山吹、紅などをぞ着たる。白き單衣のいたくしぼみたるを、うちまもりつつ書き果てて、前なる人にも取らせず、わざと立ちて、小舍人童のつきづきしきを、身近く呼び寄せて、うちささめき取らせて、去ぬる後も久しくながめて、經のさるべき所所など、忍びやかに口ずさびにし居たり。奥の方に、御手水、粥などしてそのかせば、歩み入りて、文机に押しかかりて、文をぞ見る。面白かりける所所は、うち誦んじたるも、いとをかし。手洗ひて、直衣ばかりうち着て、六の巻をぞそらに讀む。まことにいと尊きほどに、近き所なるべし、ありつる

○奥の方—北面。
○文をぞ—詩文の書。
○六の巻—法華經の六巻目。

使歸りきて、うち氣色ばめば、ふと讀みさして、返事に心移すこそ、罪得らむとをかしけれ。

二百九十六段

清げなる若き人の、直衣も、袍も、狩衣もいとよくて、衣がちに袖口厚く見えたるが、馬に乘りていくままに、供なるをのこ、立文を、目を空にて取りたるこそをかしけれ。

二百九十七段

松の木だち高う、庭廣き家の、東南の格子ども上げ渡したれば、涼しげに透きて見ゆるに、身屋に四尺の几帳立てて、前に圓座を置きて、三十餘ばかりの僧のいと憎げならぬが、薄墨の衣、薄物の袈裟など、いとあざやかにうちさうぞきて、香染の扇うち使ひ、千手陀羅尼讀み居たり。物のけにいたう惱む人にや、つすべき人とて、大きやかなる童の、髪などうるはしき、生絹の單衣、あざやかなる袴長く着なして、ゐざり出でて、横ざまに立てる三尺の几帳の前に居たれ

○千手陀羅尼—千手觀音經の中にある呪。
○うつすべき人—寄呪（ヨリマシ）。

ば、こなた様にひねり向きて、いと細う、にほやかなる獨鈷を取らせて、ををと目うちひさぎて讀む陀羅尼も、いと尊し。顯證の女房あまた居て、集ひまもらへたり。久しくもあらで慄ひ出でぬれば、もとの心失ひて、行ふままに隨ひ給へる護法も、げに尊し。せうとの桂したる細冠者どもなどの、うしろに居て團扇するもあり。みな尊がりて集まりたるも、例の心ならば、いかに恥かしと惑はむ。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさを、憑人の知人などは、らうたく覺えて、几帳のもと近く居て、衣ひき繕ひなどす。かかる程に、よろしとて、御湯など北面に取り次ぐほどをも、わかき人人は心もとなく、盤も引き下げながら急ぎてぞ見るや。單衣など清げに、薄色の裳など萎えかかりてはあらず、いと清げなり。申の時ばかり、いみじうことわりいはせなどして許しつ。「童女几帳の内にとこそ思ひつれ、あさましうも出でにけるかな。いかなる事ありつらむ」と恥かしがりて、髪を振り懸けてすべり入りぬれば、暫しとどめて、加持少しして、「僧いかにぞや。さわやかになり

○護法—佛法守護の神。
○せうと—兄人。
○細冠者—細やかなる若者。冠者は元服したる少年の稱。
○憑人—物のけの移りつきたる人。
○御湯—御藥。
○ひさぎ—ふさぎ。
○許しつ—物のけの降伏したるをなり。

給へりや」とて、うち笑みたるも恥かしげなり。「僧暫し侍ふべきを、時の程にもなり侍りぬべければ」とまかり申して出づるを、「人人暫し。ほうちはうたう參らせむ」などとどむるを、いみじう急げば、所につけたる上蔦と思しき人、簾の許にゐざり出でて、「いと嬉しく立ち寄らせ給へりつるしるしに、いと堪へ難く思ひ給へられつるを、只今おこたるやうに侍れば、返す返す悦び聞ゆる。明日も御いとまのひまには物せさせ給へ」などいひつゞ。「僧いとしふねき御物の怪に侍るめるを、たゆませ給はざらむなむ、よく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなむ喜び申し侍る」と、詞少なにて出づるは、いと尊きに、佛の現れ給へるとこそ覺ゆれ。

○時の程—時は例時の作法にて、ここは夕方の勤行ならん。
○ほうちはうたう—法施報當か。
○しふねき—執念の字音を活用したる語。
○いとなげ—暇無げ。

二百九十八段

清げなる童の髪長き、又大きやかなるが髯生ひたれど、思はずに髪うるはしき、又したたかに、むくつけげなるなど多くて、いとなげにて、ここかしこに、やむごとなき覺あるこそ、法師もあらまほしき業なめれ。親などいかに嬉しから

むとこそおし量らるれ。

二百九十九段

見苦しきもの　衣の背縫片寄せて着たる人。又のけ領したる人。下簾きたなげなる上達部の御車。例ならぬ人の前に、子をゐて出できたる。袴着たる童の足駄はきたる。それは今様のものなり。壺装束したる者の、急ぎて歩みたる。法師陰陽師の紙冠して祓したる。また色黒う痩せ、にくげなる女の髻したる。髯勝に痩せ痩せなる男の晝寝したる。何の見るかひに臥したるにかあらむ。夜などはかたちも見えず。又、おし並べてさる事となりにたれば、我にくげなりとて、起き居るべきにもあらずかし。つとめて疾く起きぬる、目安し。夏晝寝して起きたる。いとよき人こそ、今少しをかしけれ。えせがたちはつやめき寝腫れて、ようせずは、ほほゆがみもしつべし。かたみに見交したらむ程の生けるかひなさよ。色黒き人の生絹の單衣着たる、いと見苦しかし。のし單も同じく透きたれど、それは片はにも見えず。臍の透りたればにやあらむ。

○のけ領―抜衣紋。
○法師陰陽師―僧形なる陰陽師。
○えせがたち―わろき容貌。
○ほほゆがみ―頬歪み。
○のし單―紅の打衣か。

三百段

物暗うなりて、文字も書かれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書き果てばや。この草紙は、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなく、人の爲便なきいひ過ぐしなどしつべき所所もあれば、ようかくしたりと思ふを、心より外にこそ漏り出でにけれ。宮の御前に、内の大臣の獻り給へりし御草子を、「宮これに何を書かまし。上の御前には、史記といふ文を書かせ給へる」など宣はせしを、「清枕にこそはし侍らめ」と申ししかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、怪しきを、故事や何やと、盡きせず多かる紙の數を書き盡さむとせしに、いと物覺えぬことぞ多かるや。大方これは、世の中のをかしき事、人のめでたしなど思ふべき事、なほえり出でて、歌などをも、木、草、鳥、蟲をもいひ出だしたらばこそ、「宮人思ふ程よりはわろし。心見つなり」とも譏られめ。只心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人並並なるべき耳をも聞くべきものかはと思

○内の大臣―伊周。
○枕にこそは―枕もとにおく、即ち座右におく草子にこそは。
○耳をも―評判をも。

ひしに、「はづかし」なども、見る人は宣ふなれば、いと目安くぞあるや。げにそれもことわり、人のにくむをも善しといひ、譽むるをも惡しといふは、心の程こそおし量らるれ。只人に見えけむぞねたきや。

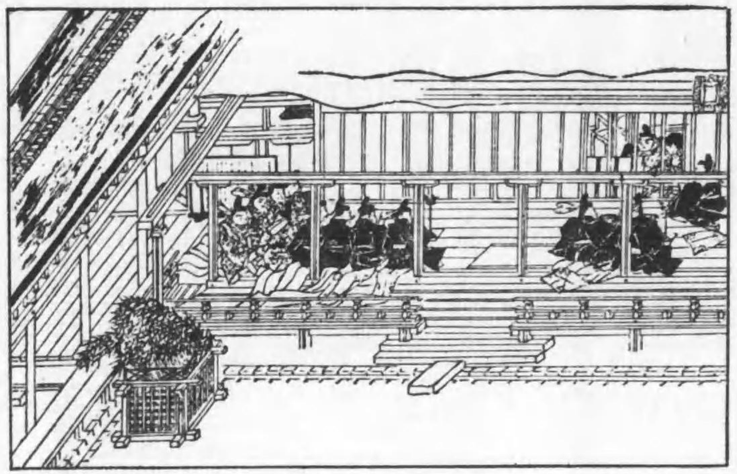
三百一段

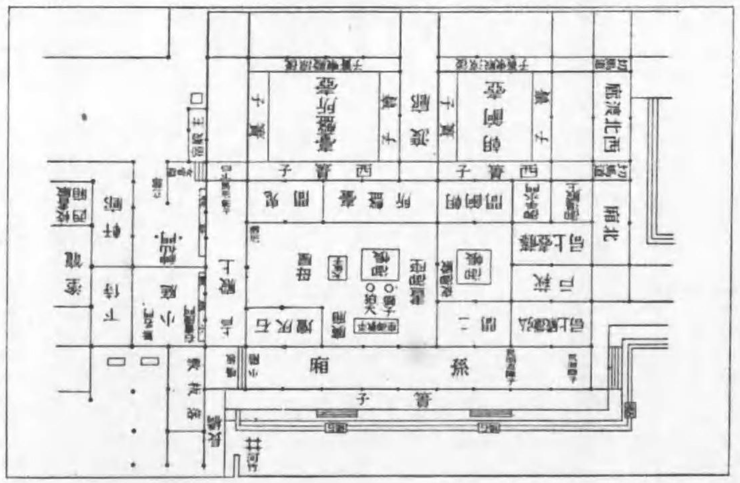
左中將のいまだ伊勢守と聞えし時、里におはしたりしに、はしの方なりし疊をさし出でしかば、この草子も乘りて出でにけり。惑ひ取り入れしかども。やがてもておはして、いと久しくありてぞ返りにし、それよりありき初めたるなめりとぞ。

註校

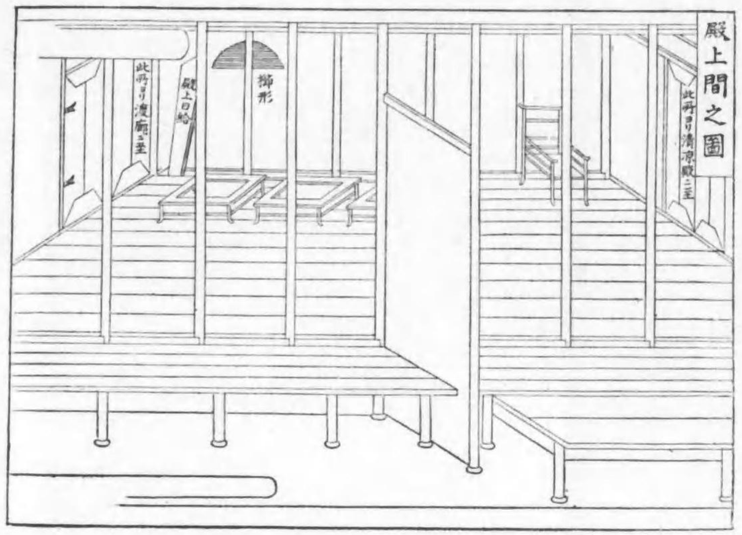
枕草子終

清涼殿の圖

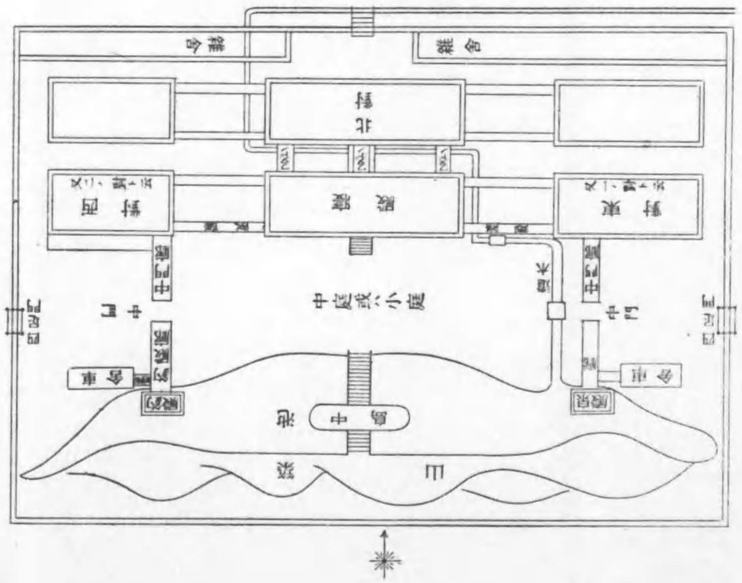




殿上の間の圖



寢殿造の圖


築山
島中池
殿舎
殿舎
北對
殿舎
殿舎
殿舎

◎藤原氏系譜

（大字は枕草子中に現れたる人物なり又○を附したるはこの草子中の稱呼なり）

- ○忠平　貞信公
  - 實賴
    - 敦敏
      - 佐理　宰相
    - 賴忠
      - 公任　宰相
  - 師輔
    - 伊尹
      - 義懷　權中納言
      - 義孝
        - 行成　兵衞佐、頭辨
    - 兼通
      - 正光　大藏卿
    - 兼家（系別出）
    - 爲光　權大納言
      - 齊信　頭中將、宰相中將
      - 公信　侍從
      - 實成　左兵衞督
    - 公季
      - 義子　弘徽殿女御
      - 女子　中納言の君
    - 忠君　右兵衞督
    - 安子　大きさいの宮
    - 繁子　藤三位
  - 師尹　小一條左大臣
    - 定時
      - 實方　兵衞佐、中將
    - 濟時　小一條大將
      - 長命　侍從
      - 芳子　宣耀殿女御
  - 忠君
- ○兼家　攝政太政大臣　法興院關白
  - 道綱　右大將
    - 道命　阿闍梨
  - 道隆　三位中將、關白殿　只今の關白、殿　故殿、中の關白
    - 道頼　太郎大千代君、山の井大納言
    - 伊周　次郎小千代君、權大納言殿、大納言殿、內大臣、權帥、準大臣、母高內侍（成忠女）
      - 隆家　三郎、三位中將、中納言、母同
      - 隆圓　僧都の君　母同
      - 道雅　松君、小若君、左京大夫
    - 賴親　內藏頭
    - 周賴　少將
  - 道兼　粟田關白
  - 道長　中宮大夫、大夫、左の大い殿　御堂關白
    - 定子　大姫君、宮、中宮（一條皇后）、今上一の宮（敦康）御母　母同伊周
    - 原子　中の姫君、淑景舍（三條女御）　母同
    - 女子　三の方、敦道親王北の方　母同
    - 女子　四の方、御匣殿、敦康母代
    - 女子　五の方
    - 某　女子
  - 詮子　圓融女御、女院　東三條院
    - 賴通　關白
    - 敎通　關白
    - 彰子　上東門院

大正十一年二月五日初版印刷
大正十一年二月十一日初版發行
昭和二年十二月一日改訂二十版印刷
昭和二年十二月五日改訂二十版發行

校註枕草子
定價金壹圓五拾錢

著者　東京市小石川區白山御殿町百十番地　金子元臣

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹退三

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十八番地　白井赫太郎

印刷所　東京市神田區錦町三丁目十八番地　精興社

不許複製

發行所　東京神田區錦町一丁目　株式會社　明治書院
振替口座東京四九九一番
電話神田(25)二一四番　六六一番　九九四番　六五番

御歌所寄人・國學院大學教授
金子元臣先生著

◆枕草子評釋　菊判　定價金七圓五拾錢　送本料廿四錢
分本（上下二册）　定價各卷金四圓　送料各拾八錢

◆古今和歌集評釋　菊判　全一册　定價金六圓八拾錢　送本料廿四錢

◆源氏物語新解　四六判　全三册　定價各金參圓八拾錢（上中）　送本料拾六錢
本定

◆枕草子　四六判　全一册　定價金壹圓五拾錢　送本料八錢
註校

◆古今和歌集　四六判　全一册　定價金壹圓參拾錢　送本料拾錢
註校

◆源氏物語選　四六判　全一册　定價金壹圓五拾錢　送本料拾貳錢

終